摂津名所圖會

東生郡 二

貴重書

291.6309
Ak
2

0433

摂津名所圖會

東生郡 二

貴重書
291.6309
Ak
2

攝津名所圖會卷之二

東生郡

四天王寺　金堂　講堂　大寺池　六時堂　亀井の水　岡伽井　天照太神宮　寶殿　天皇宮　守屋祠　南大門　三室荒神祠　無野の拜石　万塔院　短冊堂　陽屋　導石　駒が池　東僧坊　勝曼院　西僧坊　多宝塔　安井清水　土塔の宮　天王寺中門　遊廊記

一心寺　圓光大師廟　駒繋松

青龍池　鐘樓　食堂　経書堂　柳所　會堂　山王社　五智光院　石華表　上の池　東の門　乾の社　万代の池

轉法輪石　椎敷　御供所　寺　稲荷社　十五社　西門　額下の池

雲水塔　舞臺　樂屋　寶藏　宝器品目　石神祠　三時堂　聖靈院　二王門　如来荒神祠　四面院旧蹟　浴室　下馬表石　安井の太神　護摩堂

鎮守古墳

六万體

牛市

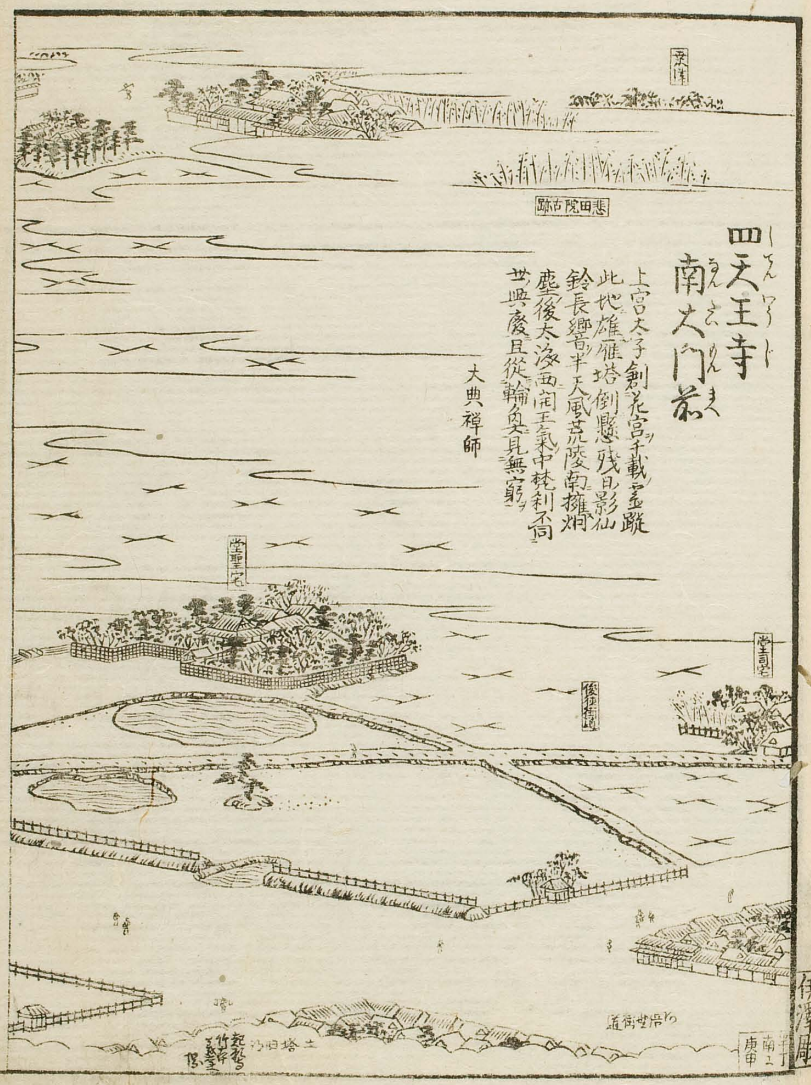
二階堂　三千佛堂　影向石　秋野の坊　庚申堂

荒陵　雲水陵　土塔旧蹟　竹義之墓

相阪清水　合法辻　三ツ鐘地藏

歯神祠　崇神天皇社　蘆間池

武庫川女子大学図書館
昭和
291.6309
Ak
117088
Z

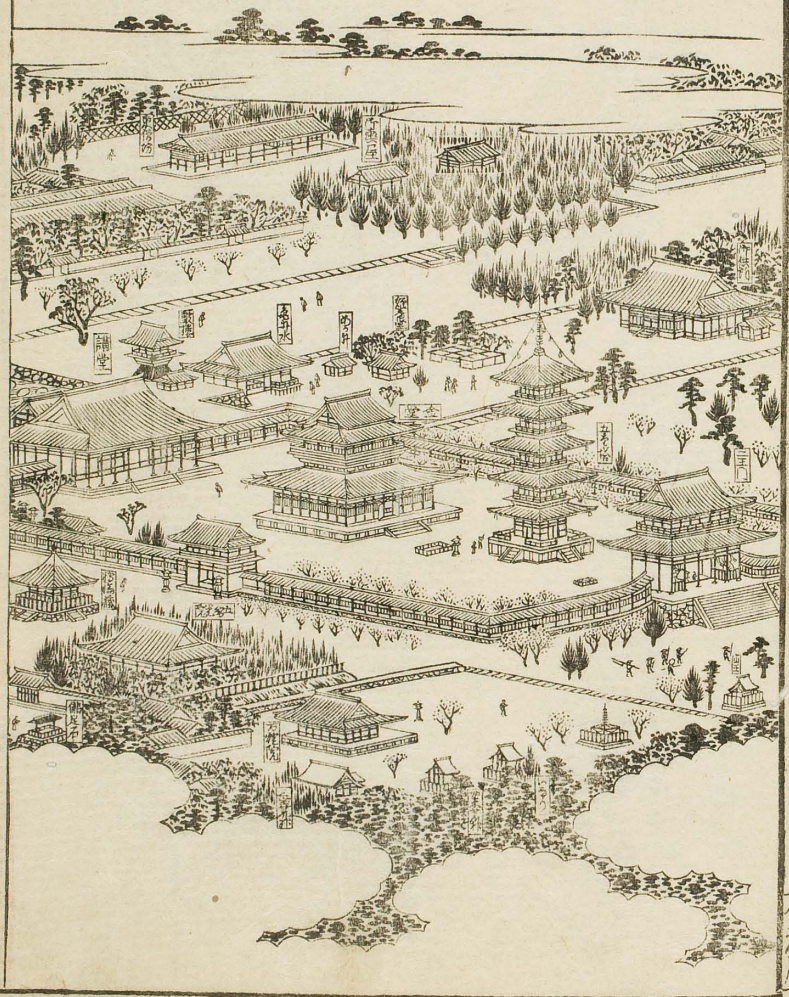


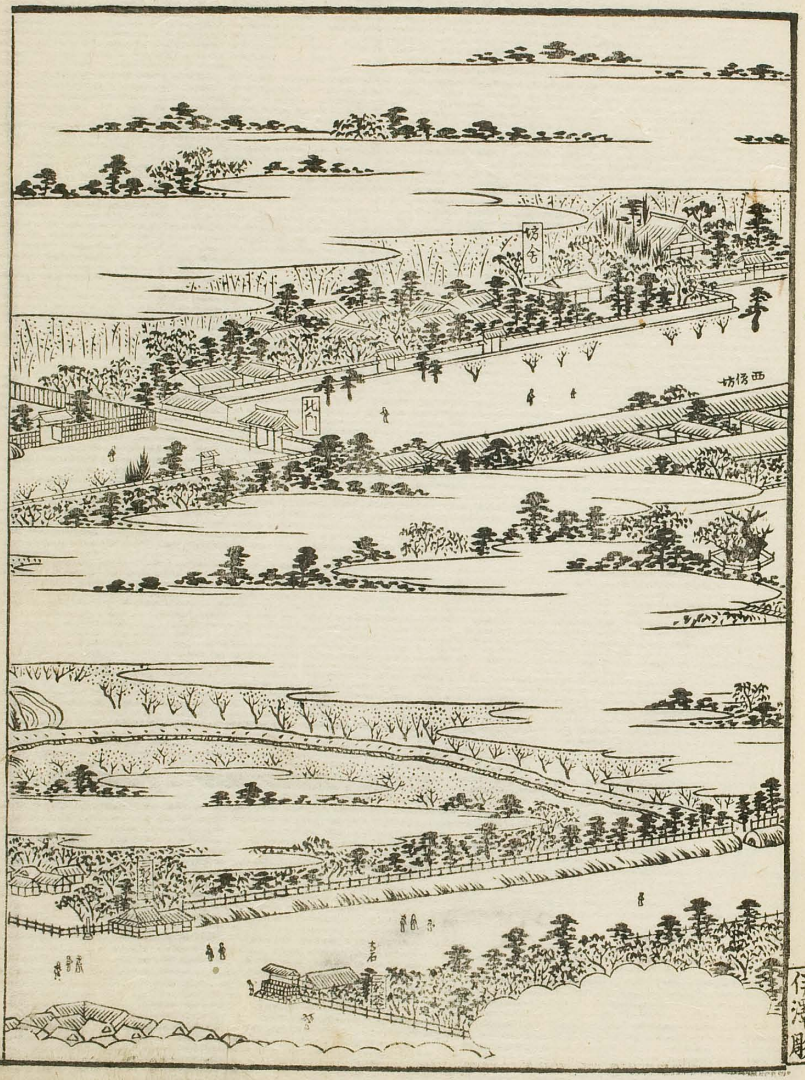
阿閑嶌　王子の祠　天王祠　安倍野
北畠顯家卿墓　小町墳　經　冢　播磨墳
萱艸冢　兼好古蹟　家隆塚　新清水寺
牛堂　延海の塔　有栖清水　大悲水　増井清水　浮瀬　貝盡
遊行寺　藥師佛　芭蕉翁碑銘　芭蕉翁像　珊瑚寺　豊臣尉像
風吹不動　月江寺　天王寺墟　西照菴
鳳林寺　隆專寺糸櫻　孔雀茶店

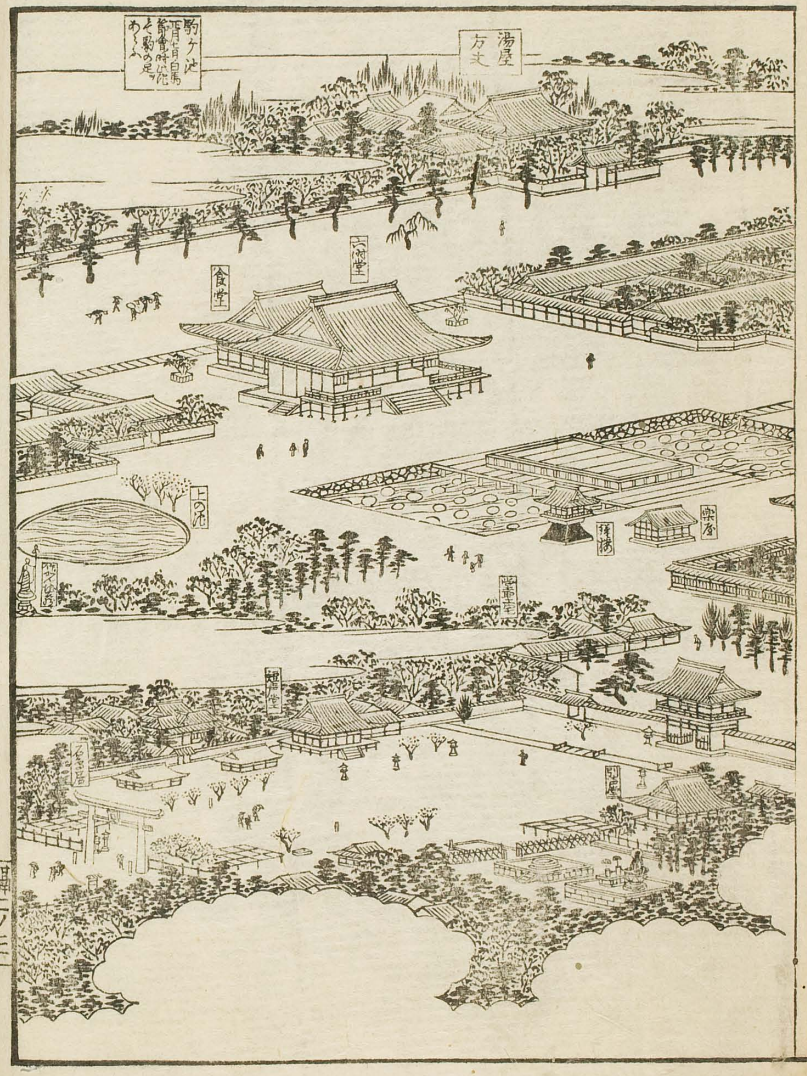
攝津名所圖會卷之貳目錄終

攝二ノ壹　伊澤彫

四天王寺伽藍圖



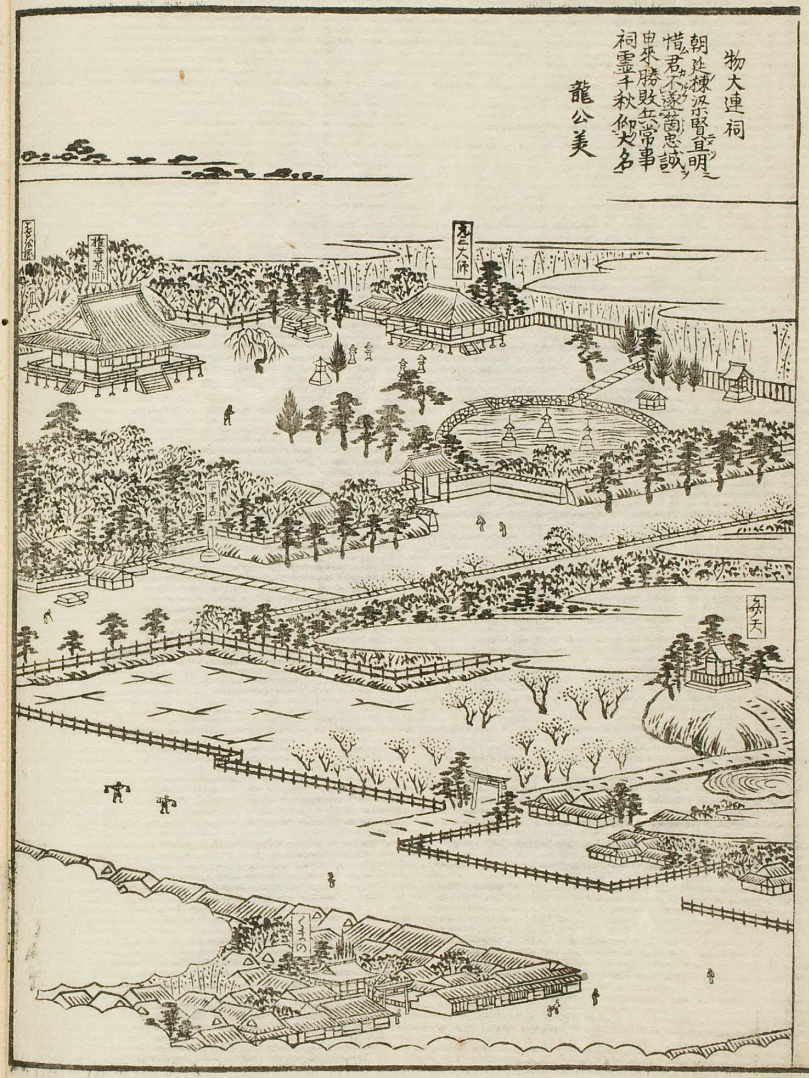

西坊
横二八三
伊澤彫

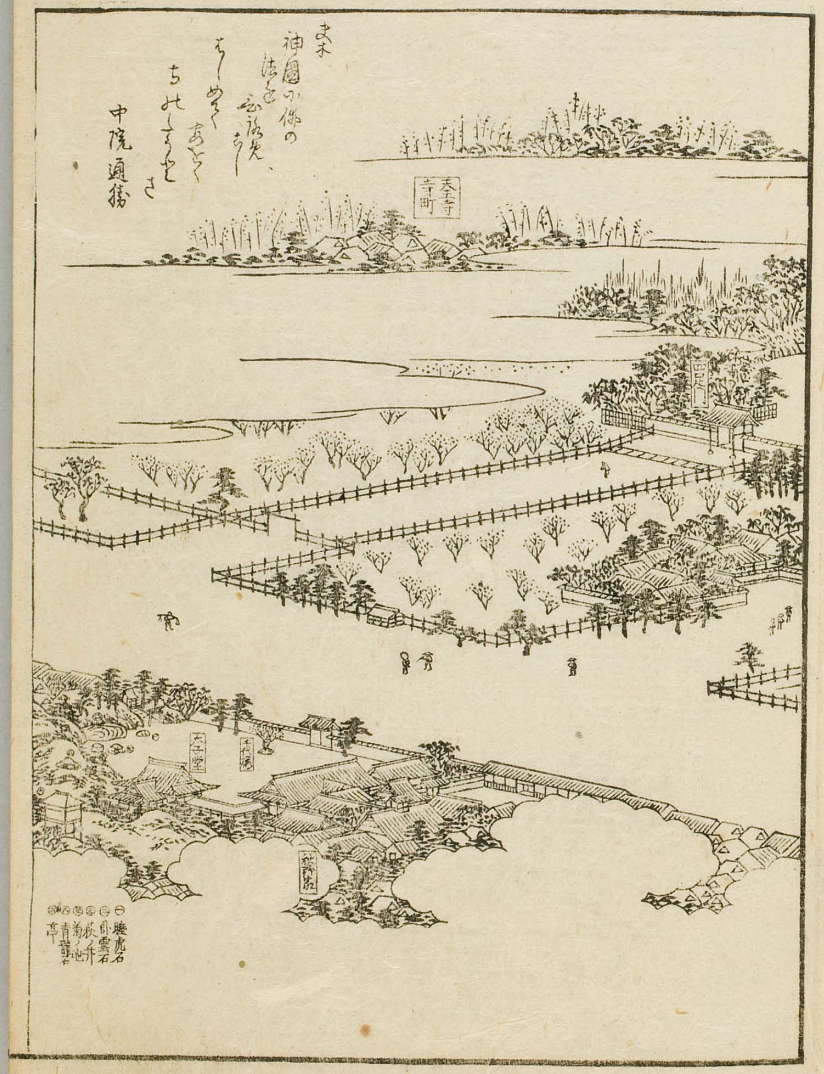

湯屋
方丈
食堂
上の池

物大連祠

朝廷棟梁賢哲明
慨君不遠忠誠
由來勝敗在常事
祠霊千秋仰名

龍公美





東生郡 日本紀に難波左郡と書く東は河内國淀川若江茨田の三郡の界の西北は西成郡の界なり南は住吉郡の界なり

荒陵山四天王寺敬田院 東生郡にあり京師は宗兼宇今時天台宗に属す東殿山日光御門跡に属す一名難波寺又難波天寺又御津寺法花園又堀江寺又荒陵寺ともいふ 難波のこの寺こそ芦の葉のそよぐ波さわぐ

新

なのそよく志賀の浪のいにしへ世中にふひろまれ 行基菩薩

支當山は上宮太子の御草創なり由来は太子傳に云て世の知所なれば委記もるに遠代祖國史紀傳に接ざるに皇太子は用明天皇第の皇子にして欽明帝即位三十三年壬辰の春正月元旦に降誕まします厩戸の前に御母御産の痛めるに厩戸皇子と號す 更名聖德太子或耳聰王或豐聰耳皇子或豐耳聰王或豐聰耳皇子 敏達帝六年冬十月太子六歲の時百濟國より經論五百卷日本國に渡る是天竺の佛教我朝に始まる太子は崇の御時に新羅國より金像の釋迦三尊を我朝に渡しまる少君臣共に尊崇なる物部守屋大連進出て申るは我朝は三柱の神にて建さ在るに御國の王地にかけて外國の神德を入れて國家の政事を敬ふ載に安かるに小佛は原

更秋の命にて今外戎の邪法を敬恭しめ事忽神明の崇りを早く佛像経巻を水に投じて永根を断天下の人疑を止て後代の惑を散じ神明の擁護萬々崇ありん為佛霊有て猶法を身に加へ十と諫奏数日に及びかるも蘇我馬子太子の傍に在て諫しをれば守屋大連太子怒同帝十四年太子四歲の時佛法最初の建立を興厳寺に焼捨て佛像経論を焼失し僧尼を流刑に法も蘇我馬子の姦佞邪惡の臣を滅んと其勢兵万三千餘騎にて河内國淀川城小楯竜の時に崇峻帝二年秋七月諸皇子群臣軍議して今守屋大連暴逆一百官に教いざ滅んを伯瀬部皇子竹田皇子厩戸皇子雄略皇子春日皇子蘇我馬子宿祢紀臣麻呂宿祢巨勢臣比良膳臣賀艶夫葛城臣烏那羅等軍勢に奉て自守屋に対し討る又大伴連噛阿陪臣丞羽臣神子阪本臣糠子春日臣等は俱に軍兵に従志紀那より淀河の家に到る守屋大連親ら率て軍に卒て稲村城に築にあり於て太に責戦に事急大連衣冠にして朴枝の

間に昇り臨みて射る矢雨の如し其軍強盛にして聖に溢れり官軍大に
恐怖して三廻却退き逃る是時厩戸皇子束髪にして額あり軍の後に隨
ひ自新度て曰将に敗軍無んと本は佛神の祈願に依りて成雖し乃
白膠を以て斬取て疾四天王の像を作り頂髪に置て誓て曰今若我
を以て敵に勝しめ給へ必當に護世四天王の寺塔を建立すべし
願我馬子大臣も又誓願して曰凡諸天大神王我を助衛利益を蒙らば
諸天王の奉為に堂塔を建立し三寶を流通ん と言已て兵を進
む蘇子の御馬廻りは身の丈八尺許の勇猛の人なりしに敵に
幸ひ矢の射られたれば四天王の化現なりと我迹見首赤檮に
射術の妙を顕れば遂に守屋大連を枝下に射墮して凱歌
を上る即大連の親族らも誅せられ敵軍大に敗れて
落る者数を知らず於て軍静まり天下と形れば祈
誓の如く摂津國に於て初て四天王寺を建立しめ給
ひ即守屋勝海等の所領田園十八万六千八百九十代を没収して
寺領に宛てゆ河内國弓削鞍作等の散地十二万八千六百四十代并
小摂津國鶏田熊凝等の散地五万八千弐百五十代田園十二万八千
餘町館舎八箇所左右大臣四人の將軍官兵に配給し生捕弐百
七十三人の男女を召あつめて蘇子自御教化あり出家入道して
四十六ヶ所の伽藍に召つれ奴婢系仕へ奉る又守屋
大臣の中臣勝海の下人の頸を法隆寺の廻廊戊亥角三間の花の下に
深く埋み供養あり是時守屋の四十二寮を又十六寮の御時に厩戸皇子
廿二寮の御時御伯母豊御食炊屋姫に敏達帝の皇女を奉り崇
神帝崩ぬ後御即位有て推古天皇と申奉る是を以て周成王の時
周公旦の例を以て勅あり て摂政として萬機の政を補佐し四海の民を
撫育しゆ給へ我朝摂禄のはじめ最初に王道の岸に賞を建立
し人民奥鮮高濤を立岸に崩し赤く渡り鳥多く聚集て佛

剛と破り嘎喝殺伐きびし堂塔伐穿ち拔いを子日まれい守屋乃
逆臣等う霊来て拔破るなり法華島伐降伏せん為小をる大寶と現
じゆひれいみる迹矢行懸ゆく成小そう寺哺とるるいこれ形り今も金
堂の後乃蟆股の雌雄の鷹の彫あい伐縁ゑ聞ひ於是王道の宗より
三拾餘町南荒陵の地小引移しゝ今のゆく建営しゝ材石い山城国
愛宕郡拝田郷土草里より運送伐ゆ小みをるの守尊如意輪観音の霊
瑞あれば六角堂伐建営しゝ退々四十六間所の精舎伐ゆかこゆひる
今の荒陵山を過を七佛轉法輪の砌形れい長者の御身の時ゆ来伐供養
し正法伐護持しゝ其由縁伐吸て伽藍を建立しゝ絶えい伐霊地小
を崔巣伐くゝ伐蛇伐ゆ伐地の怪乃ゆも出伐嘎喝形く寺哺鳥来ら
伐自石より水とおくゝ伐自石ゆ出法水と号伐菩提ゆ流伐腋
す伐法華ゆ形る極楽浄土の東門小當て三棺同居の廟地小定む
ゆ乃ら浄土小をめい縁雲迹て中道小ゆい函伐厭しゝ峯を春の

雨より法しゝ道小至白族を社の宗乃風小形びくゝ乃ゆ多しゝ四国の伐伐
営ゆしを四節の意願形り印しゝ此浄刹小治する宗ゆ小頑聖霊の示意小任
て一佛浄土の小臨伐遂しゝ

（上日本紀略の本頑縁起を傳等の要文伐據）

抑當山別當職を
兼和手中圓行和上れ初任の別當ゆ元永中小ゆ大僧正行尊保延元年小任
行慶僧都保元中小を道慈法親王長寛二年ゆ貴性法親王治承
の頃を明雲法王寿永三年小定恵和尚建久七年小實慶承元
元年の頃を大僧正慈圓別當職伐勤ゆ人以の御名慈鎮

以の名ゆ四ゆの八町のゆ伐小伐化しゝ

慈法和尚

叶孫を慈鎮和尚こゆ守勢しゝ今の寺しゝ荒陵の獅ゆ仁徳帝五十八年
の紀小見しゝ今の奈良山茅元の赤しを真性大僧正守勢しゝ永仁の頃ゆ
良觀上人ゆの名忍性上人鎌倉極楽寺の開基ゆ元和元年小を台命小より
謚獅聖應大師元亨釋書小見
南光坊天海大僧正守勢別當ゆ公（江戸東叡山の開基謚号慈眼大師）世々の騨摂小荒廃
を山しゝ

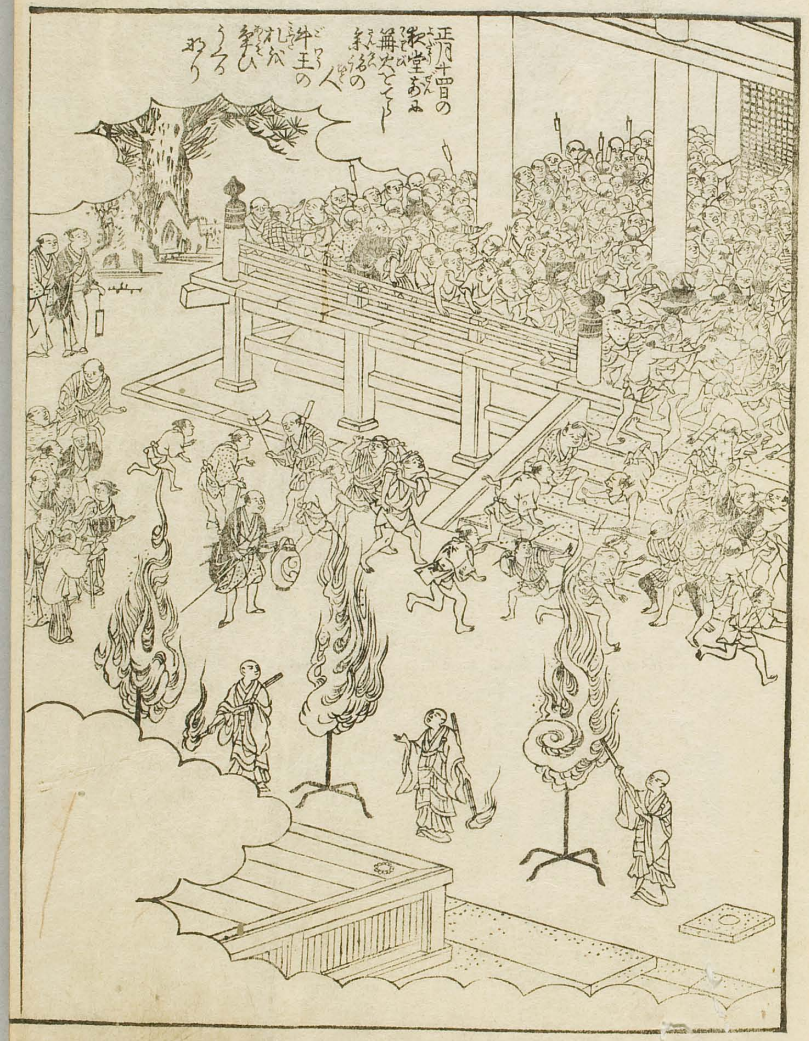
天ゆ將軍家の崇敬厚く遠小伐遠伐加ゆ事数回形り

太子堂生身供

太子御誕生の祝賀として二月五日より十四日まで午刻より若樂乱声あるべし

天王金剛界
津州琪樹
玲瓏寶珍
佛寶塔彫成
孫出殿名種
樂作詔武經
千石燈照幽賢
度衆形餞舍
僧加能詩故
先言大法甘
東流

艸廬


正月十四日の
夜堂あゝ
舞ひてゝ
終るの
人
牛王の
札を
撒
うろ
ぬり

修正會
正月元日より
十日まで六時堂
ゐくはらる
丹羽桃溪

金堂ふ於く毎年
正月十一日正番匠
相番匠面〻六人立
双びくく笏の
式例のく枕せ方ら
堂上ふ堂仕初ル
九しく教をん
皇太子番匠の事ハ
教させ給ひ遺風くを
ちくれる

正月十一日
金堂
手斧始

元弘二年楠正成天王寺に出張し淀遠の橋の南にて隅田高橋に減し日年八月正成をみの未来記披見の事を宋記に見くうられ楠を例の除に思恵の事ゆえ他に去るべきにあらざる近くは天正四年五月三日惡光に羅は厥后豊を固命にて再興に為べ又元和中兵火にて慶長に 将軍家より再興に命ぜられて已に舊観に復し又寛文四年に修補ありて境内東西八町南北六町諸伽藍とやくく畸昔に変に厳然たる日本紀に公家の保利多くは頽廢し名のみ遺りて桑田海と変ずるもの多し當山は皇を予御創建の相ありて今一天の宝有保案に累代事天皇震旦に もいまだ比類に聞ざる梵園なり

千載　世に比類なく聞ざる梵園なり　崇徳院天王寺に御幸の時詠寺思昔とりし事に

雪玉 むこの玉の美敬ようやくに世ともあり仏法のこの系 實産

青龍池 金堂の中にあり むかしの龍陵池にて廣大にして青龍都に樓
多池彫りにて伽藍建立の時埋めし青龍に漢祀ようの
小池を残れ是を白石玉出水とて則亀井の隙にて此法泉寺に優々と
通ずして流れ櫃より亀井堂へ通ひながれたり
轉法輪石 金堂のあり本願縁起に東廣を釋迦如来轉法輪所
彫りに時長者の身と生れて仏法に助護に此因縁にて
刻立れとこそ
拾玉 維摩はやふれむしのあかきまちかれとの法輪法輪 慈鎮

日 此寺に安むさるの石の上にかく安に法むすひ名り 仝

五層寶塔 金堂の南にあり 是に寶塔は和州額田部村額安寺にあり一説
同國黒田勝樂寺にも云慶長中再營の時台命にて門跡に所
彫り層毎に雲水の彫あり 釋迦如来畫像 四天王木像 八祖畫像 安置
本願縁起に日寶塔金堂極樂土の東門中心に相当ふ寶 鑒に毛法以て
佛舎利六粒に相加へ柱の中に龍納る事は六道に利益の相を表する
彫りに寶塔第一の露盤に誓ひ手金に鍍む遺法無滅の相に
表すと云ふ斯りにを寺に建立の時御髪の毛六筋に佛舎
利六粒に加へて塔中の真柱に入れ地獄餓鬼畜生
羅人間天上の六道の流生に利益しまんと御誓願の下
盤に鍍に黄金に鍍に其金の色の変化に入れて仏道の
無疑とをしめん為彫りにて今の寶塔に置しの時 [illegible]

の左の方の頭髪を六筋とりて仏舎利に相副納る彫りに
日本紀に推古天皇十二月に仏像四軀に四天王寺塔内に納せ
塔のうへに残るむりなく鷲の雲とりかへ添そうれしき 慈鎮

寺縁に金堂の破風に雲のうへり来あり近き世までいつちも彫れ雲来
りて[illegible]ゆる名に此寺の先徳の手のいらりに見彫りと若れ慈鎮和尚
の寺も此ちろに
漢ゆくこそ

講堂 金堂の北に所に桁行十三間を三尊寺 阿弥陀佛觀音勢至虚空藏四天王
彫像の間三寸

誕生佛 寺に安に皇室に此堂にて諸経に講讃にて是なり
本願縁起に其堂四間四面にて是なり
講堂の後蓮池の側にあり此梵法に安常住の法と称に

鐘樓 樓の桁行三間三尺六寸五分 梁行三間五尺五寸

阿弥陀佛 [illegible]

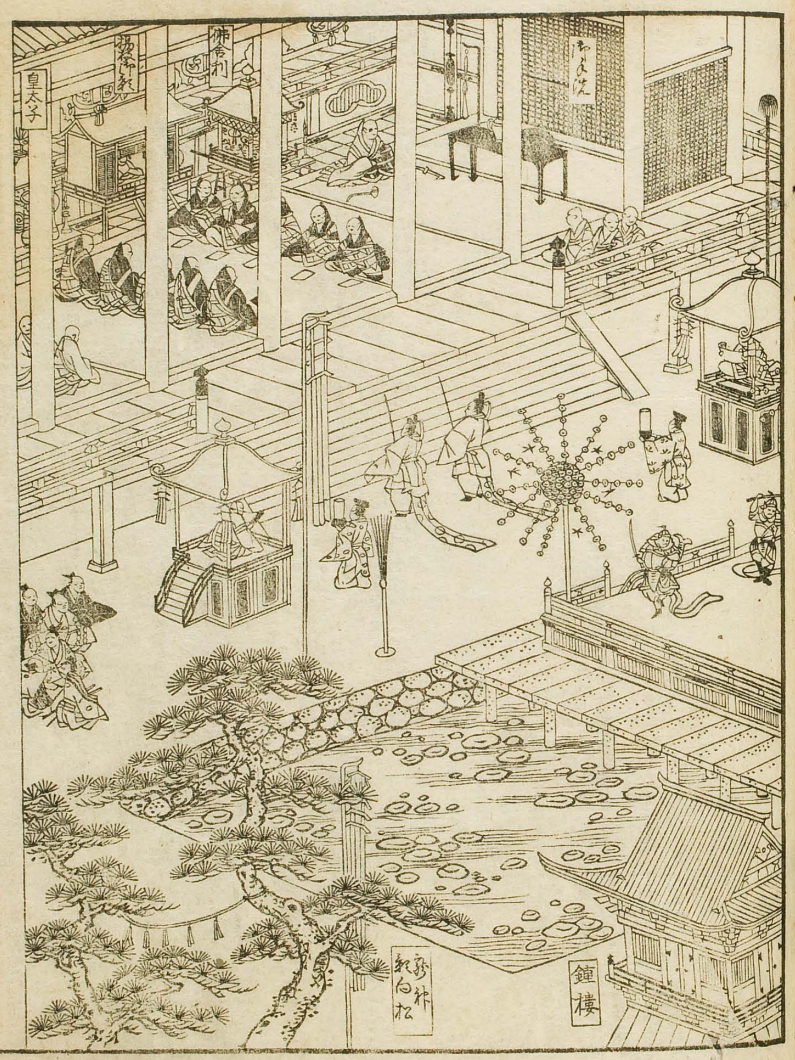
どやいはてんとりしの俗人の[illegible]を寺の樂をよく固に[illegible]
わんせてあのまのめでたくそこの[illegible]作る事かりもとくれとりゆくをを
まの御時の圖いまに作る此くの[illegible]にあり六時堂の前の法く其
聲黄法調のを彫り彫り寒暑小隨ひてにのりくさりあ[illegible]を小二月
限槃會より聖霊會までの中間と指南に秘藏の事彫り

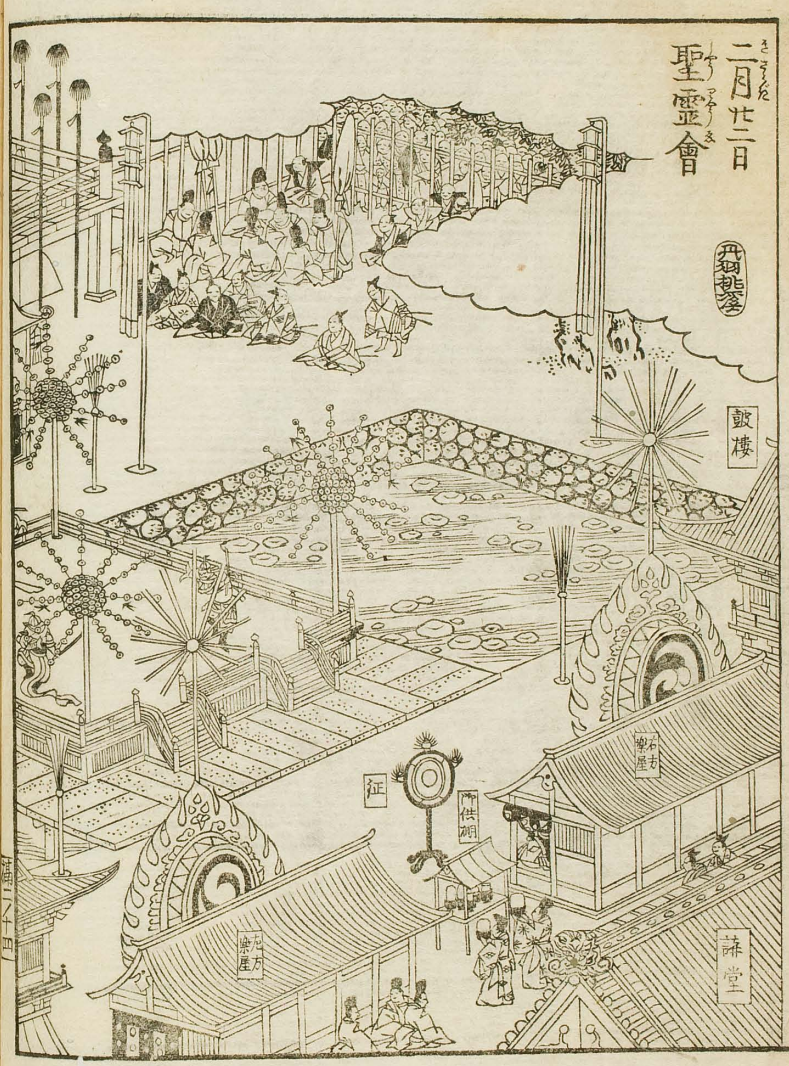
代調子にもちていにしの聲をもてこの伶人とともに元祿の聲を黄鐘調に
調子平是安常の調子祇園精舎の無常院の聲と西園寺の文黄鐘調小
鼓打ちぶくとて打ちなさび鼓くらべ打ちなぶ遠國より尋
おされ多り陣金剛院の法の聲ゑうしゑうてうたり
なる四十二番の市附百濟國より味摩之といふる樂人まりて伎樂曾弦の曲
とけりはめて或朝小傳てうたるまるけ多くのまるまる聚てうれ伝曾しむ當寺小三十二
川勝川滿ちるけ多くのまるまる聚てうれ伝曾しむ當寺小三十二
人の伶人を定め置れ之宝供養の砌を設樂舞曲伝奏して帯恩伝
質嘆あるしより已来朝廷伝ちるる法ちの伶人を小ぶ樂伝奏
ちる奉風俗ちるれる伝味摩師ちるの樂人小百濟國の人小あるに
中國呉國の人小ちる三韓小ちる日本へ来り小ちる呉國を今の南京へ
周の代より漢の代小傳ちる漢より呉小傳ちるなれ上古聖人の
天下伝治ちるひし優樂小ちる唱歌を奏ひしかも歌樂を
在せり書よを奏ちるる人八人ちる克諧けてる樂と奏ちるれは
百獸率舞しる見ちるうみ史記小を所謂小琴伝てび彈ぞれ玄鶴
一雙門戸小まる再ひ奏ちるれ小翼伝舞て舞ちるるる我朝
歌伝ちる所生鴻小徹て青山と聞ひ徒琵伝彈して弁財天
の感ぶ小あるちる其外る樂伝ちて神明佛陀伝感せ
事舉てかくかくうれを當寺の伶人小秦氏ありて之樂小右方
左方の二流あり伝寺の樂を右方ちる毎年正月十九日ちる奉
所ちて禁中紫宸殿の階下小流て
舞樂ありちるもちるもちる

○鼓樓 法樓の東小あり。樂屋 左右小あり俱小桁行五間一丈五寸
同教法樓小同し。
蓮池の上小あり石臺ちる六間二丈六寸
○舞臺 四間五丈五寸
舞臺の下小あり蓮花多し夏日の盛ん
○大寺池 水小映して階香殿小ちる

大寺の池の蓮のむ咲はゝ知小多向と咲ぬ扨 慈鎮

○六時堂 蓮池の前小あり 桁行十三間五丈五寸 梁行九間五丈七寸 堂小
於て六時禮讃伝ちるれしゆ六時堂とあり 往昔
傳教大師草創ちて比叡山根本中堂伝移ちるる
堂内小傳教大師禪定ちる座席の遺あり。 藥師如來 日光
月光 千手觀音 四天王 不動明王 吉祥天女 妙見星 計都星
羅睺星 賓頭盧 寺伝安置伝三天會小池上石橋舞臺小
於て舞樂数々あり奥小見くさう 聖僧文殊大士 安置
○食堂 六時堂の後小あり桁行十間二丈六寸 梁行五間三丈
○椎寺 北の門の側小あり傳教大師の御建立ち昔池小大寺の椎樹有
しは伝代て大師を忍ひ寺尊伝仏ちるる人椎の翁と稱ち
寺尊藥師佛 日光月光十二神將 元三大師 日所小安置伝 諸人大師の御圖を
取て右内伝定む
普賢菩薩 日所小安伝傳教大師の俗ちる伝普門院ちる伝華三昧堂
ちる人堂後の叢の中小俳師芭蕉翁の墓ちる伝生氏建ちる
○寶藏 東僧坊の東小あり十一面觀音伝安伝
桁行十二間三丈五寸 梁行四間四寸


皇太子
鐘樓
彩神
紀白松


二月廿二日
聖靈會
鼓樓
征
講堂

寶器品目

○皇子楊枝御影 御年卅九歳の時當山亀井水小瓶と換し楊の枝に画せ給ふる御影なり故小名とん

○孝顔縁起 孝子の真影御手形の御印記もあり故小御印の印記と謂て和州法隆寺小贈正倉院 門縁起 後醍醐天皇宸翰皇子の御製化の縁起と此記模写し御小巻に並て部々小御印の縁起とも人皇の真筆なり 皇子御導 七条袈裟の御寄附 俳御衣 一腹

○丙毛槌林御劔 一振 六目鏑矢 一筋 守屋退治 七星御劔 一振鎧小七星 現れ給ふ

○皇子御影 十六条四十九条衣像 將軍本多門天 皇子御作 御自作

○閻浮檀金弥陀三尊 皇子の護持佛 両脇士鳥佛師作本像 扇面法華経 皇子自画 自書

○京不見留 皇子御作大小三管 皇子御生涯秘蔵 横笛 永く當山の寶品と成り此小百三代の帝 後花園院 霊元院 御宸筆 後有ざさの宣旨下りしか其時の秋野伝印これを持して朝廷小 何事も彼小氏留途中小れて二ツ小 孔一名大小 鶯三孝 のよし奏聞して厳重も備へ給へ堂〻〻帰山の後箱の中より出し見る小えの小く秘蔵他坊〻愈て初小変る事彼小故小さよりと奏達せしなり 中より帰つて永く見ざる留なれべとて永不見と勅諚しかし今も二月 聖霊會小ハ俗人に留なし 細字法華経 南岳大師筆 月記文堀井御門跡 奏しなり 慈恩寺 慈恩寺 慈恩寺 慈恩寺

○番匠佛師 番匠の異と必て文字法形して作るの点字名影彫りの佛異と必て作るの名号あり両幅共小さい三間余あり世小ならば 圓しとして雅なりて其名高し。千孝琴 楠正成 寺附 孝子繪傳 土佐將監光信 筆

○孝子三十五歳画影 御自画。円廿五歳尊像 秦川勝作 絹千手觀音像 弘法大師の作 坂上田村麿奥州征伐 文臺 并硯 當山西門衛門の古水法師所造 西門石衛門奏状 忍性上人 筆

○紫藤琵琶 石大將頼朝 寺附。樂孝敦 円卿 寺附。唯桑琵琶 後徳丸の父 通俊奉納

○皇孝御褥之切 二種 未来記傳義 楠正成の筆初小りしく正成未来記 拾見の事當山の秘蔵 今後小秘て明ず

○普門品 平法盛の筆。古今集 後寛僧都の筆。漢代古鏡 東山殿。天龍八部面 八歳原 頼朝寄附

龍神面 弘法大師。法華経 元三大師。善導大師像 自作。陵王 自作

納曽利面 覺汪の作。釋迦三尊 狩野筆。花鳥繪 明戴文進 筆。大般若経 一巻傳教 大師 筆

○最上王経 一巻光明 皇后御筆 弥陀像 慈覚大師 作。出山釋迦 和泉式部 作。勝曼経 二品親王筆 般舟三昧経 聖武帝宸翰

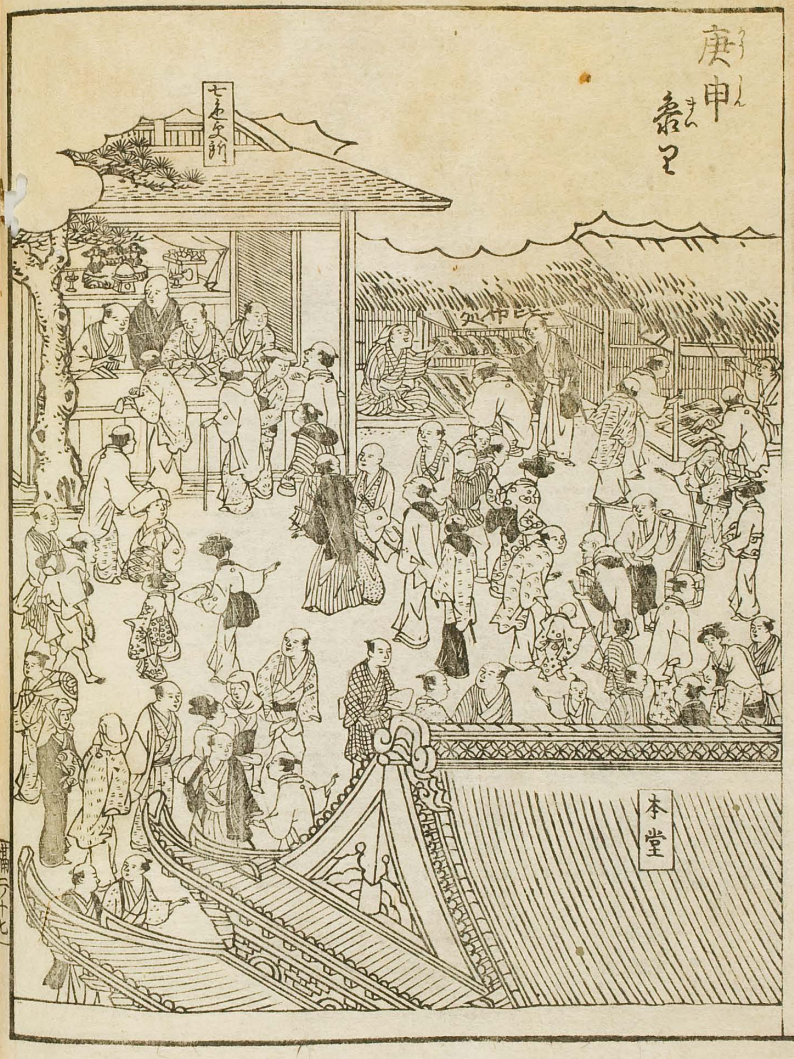
○山王權現神像 慈鎮和尚 筆。石山大師像 北源司 筆。一休筆 数軸。南無佛像 皇孝の三条彩 御自作

孝子九条影 百済國 善信作 。其小代々の帝の勅書 將軍家の製 小八宗祖師の筆 武將寄附ね名西古作の面数品樂器百餘種 繁小 よりてこれ 里とん

庚申堂

天王寺
庚申堂

天王寺庚申
遠近の
人と
丹羽桃溪


庚申
七福神
本堂

○亀井水　宝蔵の南にあり。楼に亀井堂とよへり。桁行六間三尺、梁行三間五寸。霊泉に金堂の中にある青龍化して流出したるなり。白き石の間より玉のごとく清泉涌出せるを、白石玉出水と称す。扨また御堂の前に揚枝の御水と書せるあり。ふるく影向の井とも云へり。石鏡の亀より流れあるを亀井とも云へり。盛ひろく白石玉出の旧跡に一心寺本堂の西竹林の中にあり。そむかへ恐怖にて出水絶も廊内にして亀井水の名あるを、本願縁起に化して七宝と敷と故に、慈恵僧正の小寺護摩水東に流ふるを、鶴て白石玉出水と云。慈恵僧正の築きたるとぞ。

餘は後撰遺

万代とちぎる亀井の水やさに富の小川の影もなるらん　参乳母

新古今　天王寺亀井の水に御幸して

おろかなれ亀井のあるじむもひあけて公の蔭すきるか　東門院

後撰拾遺

さしこの玉あり水に浸て結びちきりの市を小こし　前参議

新後撰

ちかとて御法の跡と来て見るにいとき水のあるる亀井の　郁芳門院安房

天王寺へ参りて亀井の水と見てよめる

山家

俤のしぬちきりの結そくれある亀井の水影うつしけく　西行法師

拾遺愚問

諸人のむもの契りに有る形よ亀井の水小初に色ぬるも　定家

拾玉

末の世に亀井すてもむ新たに多く生る光に生る　慈鎮

末木

万代も御法のおろかなるべしと亀井の水乃流くもむん　後成

流れ出てむもと亀井のこれうやうに水のあるるとひ形なる　道遥院

○閼伽井　亀井の東にあり。諸堂の。経書堂　閼伽井の南にあり。経本書写の本堂の小子向の閼伽井。

経書堂の後にあり。桁行九間五尺三寸、梁行九間三尺。此所より諸堂の本堂の小供あを持る大黒天多門天安摩陀羅天安置。

○御供所　御供所の南にあり。当寺開創の時、材石に牛車を運送に成、後半仕て所と成る則其霊所あり。祀る也。

○石神祠　同所の南にあり。求聞持堂もあり。桁行五間、弘尺五寸。梁行五間四尺。

○三昧堂　等身安置

四天王

○天照太神宮　三昧堂の南に御鎮坐。天皇宮　神明宮の南にあり。系神に欽明帝　敏達帝

用明帝　崇峻帝　推古帝　聞人皇太部皇女

等身安置

鎮座する是皇太子の御母后なり

○棚所　天王宮の南、塔の内にあり。太子十六歳尊影　安置に毎年十月朔日より七ヶ日の間、寺僧供あり。

桁行六間、梁行三間

○経堂　太子堂の北の隅にあり。如意輪観音　安置に毎年三月二日未の刻、経供養あり。寺僧に日供養あり。

弘間四方

養老元年、震旦国より渡り、仏経に供養あり。遺法太子の御時、経論供養あり。渡り、中にあり。光明皇后の御書写。一切経義疏を求めに唐下姉子太子を唐土衡山へ遣し、姉子の山に至り法華経に得て帰朝に太子拝受し、一切経に是光明皇后の御奉持の経に得て、蒙恵に龍ひて、遂に彼御経に得の太子の乾闥の後山背大兄王六時に礼拝して供養あり。一切に彼に見へ、ちなり。ふき今法隆寺にある

を始め將来の如典なりと雖も其後壁霜累て當山の寶藏に一切の古經
經函あり古經に用さる〻に一行三十四字全部を壱の法華經なり
疑人所なき愛厥の御經なりて今寶庫に藏えらるれい慈
濱和尚此寺の百首の内百年に
慈濱
慈恵大師に納め奉て〻法華經もとめて内の内を入れ中に入る

雪玉集に見へたる遊遙院寶蓮卿の和哥も此經拜見の
時よみ給へり初め金堂の下に見へたり

○聖霊院　金堂の東南にあり世俗を堂と称す　たゞ十六尊尊像
祈行七間二尺四寸奥行五間一尺七寸
御自作　薬師如来　五德轉士　四天王　等に安置す

元亨釋書曰釋仙命波州人也幼上台山無動寺習止觀兼念弥
陀額鏤三寶字背點圓弥陀像嘗詣天王寺於聖霊堂對尊像
燃一指時青龍現形指燈竭龍形隱云云

○寶殿　聖霊院の奥に有て内庫〻方四間五尺九寸此一度は都率内院と表
して閉秘の所謂あり又外庫の東の方に善光寺の如来影向乃
間あり弥陀三尊に安置せり又たゞ四十九尊尊像　御自作と安置す
驪駒の如くと現して着賢像と安置
寺頭縁起曰此道場に来て若一香一華を擎け恭敬供養し若一塵一塊
に拔て此場に拋入遥に寺の名に聞逸見て拜恭せん斯等の者一
伸土に縁に
法りんやこゝに
塗

たゞてきの君まて好ぬ仏の添に雑投の事とぞひ乱ゆ　慈濱

雑投は仏に今と春逸と詠れ恵ひけてこゝのも　今
月　十のり七のちひせ〻人のにとむみ〻に成みるよりもか　今
推古天皇を女帝にて御一世は蘇我の宮に任て万機の政とをこ
なひて十七箇條の憲法日本紀及ひ成わりて末代の亀鑑と為し禹鑒
の名に成ぬ　中臣と為し　水土と為し　日本紀　小見田　国郡の境に成る民
を安〻し四ケ度と攘て鰥寡孤獨に恵の人弾人智仁勇に
成て東夷と退け西戎と鎮め守屋の強勢に成碎さの人礼樂に興し
神儒佛の三道鼎のゆくえ〻に佛法興隆の祖と為人を僻言好
ぬ〻播岳の星の賦に衛も其邪を措不好〻鄭も其淫を容所好
天下の和樂不易德書と書〻を此皇をみの仁聲好るゝ

○守屋祠　堂の後に小あり今系濱の者守屋の名と恵むや弾と投て祠に成
守屋大連　破壊に守屋仏に傷んで鯨野權現と表にけり　多の所
今頭縁起云守屋に　中臣勝海連の三生好
生々世々相像の彼賊之中畧田地と掠取り
守塔に彼威〻る事是只守屋毀現るの〻吾と守屋〻に
影と響〻の如〻守塔を滅亡せは國家も壞失せんと云云

傳日擬尊出世のむかし提婆達多ハ生々世々の佛敬ハしも絶ゑ天王如来の記前代蒙りぬ守屋ハ假ゑ法敬と好るとも邪てをゆの
與達ハ代代ゆの方便なり
唯圓教意逆即是順の理ハ

○繪堂をゆ堂西側小あり折行八間武天七寸奥行二間を天四寸傳ゑ
聖武天皇の草創うてをゆ傳記と圖繪小露して仏堂内
小板えの故小繪堂と称ハ前大僧正慈圓當山寺勢の時撰の
傳ゆ小品邦と書画一入頂相圖賴實ゑと初メ九人の和
尚と記一常宰相為長卿小四韻の詩と賜せ一ゑ權大納言
教家卿色紙形小翰墨武樂ゆ慈圓其記と書しゆ慈鎮
慈圓いをゆ二名ハ

記文日

貞應三年甲申始自去冬三春孟夏之間以繪
師法眼尊智守本様依傳文圖繪既訖今於西
面更畫作九品往生人殊勸進一乘浄土之業
表裏共不交他事尊智圖之以詩歌形其心詩
句九品同令菅大府卿為長作之和歌兼相以
下廣勸九人各詠一首復當南北裏同畫四天
像此堂大僧正行慶寺務之間顛倒之後以聖
靈院禮堂東廟為其所今新建立干舊跡彰興
隆之本意也別當前大僧正法印大和尚位慈
圓記之云云

前大僧正慈鎮四王寺小九品往生傳と繪小書ん
あゆゆ仏人ゆとゆとゆ也ハ九品中生の方
後拾遺
ゆ小のこゆ蓮をゆ一ゆて中ゆ一夜小花を開くゆ　前拾遺家

家隆

末本
ゆて中ゆて武ゆ人ゆ赤のをゆ人ゆかれ中ゆをいとひおゆ

ゆの方ハ天王寺繪堂慈鎮和尚ハくゆおてゆしゆ人ゆ陳ゆ小
九品往生人かれ侍ゆ時中品下生の人のゆ武ゆみゆゆ中ゆ云云
宰相為長卿の詩ハ伝然上人傳記小出ゆ　楠正成未来記武見しとを平
記小書一ゆ武繪堂ゆその事なり今ハ武詩ゆも兵革の災小亡びてをゆ
河一生涯の画傳狩野
山樂ゆ書一のゆハ

○十五社をゆ堂四足門の傍小あり拝殿の三十六歌仙和ゆハ青蓮院伝親王の筆ゆ諱不詳
画ハ狩野山樂の筆ゆ　御燈籠あり　鋳物ゆて布代雅物なり　世小
名高一　祭神　天照を神　住吉　廣田　熊野三所　三十川神　白山
比咩神　龍守神　生野神　布留神　大原　春日　稲荷　松尾
賀茂　八幡宮　已上十五社の神ゆ　海年九月九日午刻　糸花の神拝あり
神主　稱宜　神ゆおてゆれ侍ゆ　舞樂あり　万歳樂　延喜樂　陵王
納曽利
等ハ

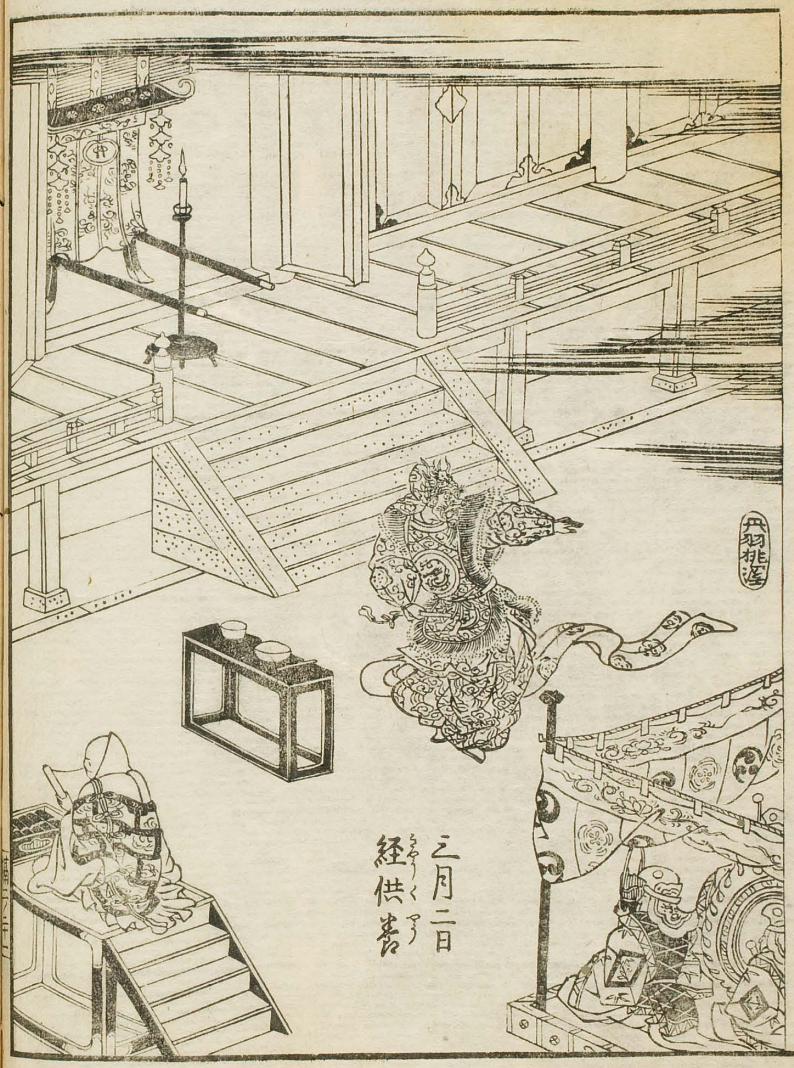
○二王門　南大門の内小あり　金剛力士像安ハ
狛犬　表裏小あり

○南大門　當山南方の門ゆて中ゆ南の傍
河邨ハ衛ゆ　住吉堺津ゆ至ゆ

○熊野禮拝石　南大門の内あり四石の其一ゆ世伝　紀州熊野御道ゆ
河邨ハいゆ一ゆの

末本
武ゆ人ゆ中のゆのゆ小かゆ安武ゆすひゆゆゆ邦　慈鎮

○山王權現社。稲荷社。如来荒神社。三寶荒神社　四社倶小南大門の
内ゆの方小あり



三月二日
経供養

○万燈院　二王門の西小あり　千手観音　四天王　賓頭盧　年代安置　毎年十月八日より十二日まで
毎日酉の刻十講會
依行に

○五智光院　万燈院の北小僧寺　灌頂堂なり　大日如来　安置　其外　将軍家御代々
毎月八日十七日九日廿四日　依行世俗　御霊舎　神牌代安置
建久年中　将軍代堂上小八ようせうの事　東鑑に見へたり
○轉輪藏　五智光院の小小あり　十六善神　代安置して一代
藏経を納む四百八十函あり　信人これを作る

○西門　西表小阿弥陀　善導大師等の画像　東の方小　釋尊　并小十
大第子の画影を安ず　信人香を薫じ　御父帝　用明
天皇の御為　小七日七夜の念佛　結願の日　功德　聖明
名號　稱揚七日　斯此　為報廣大恩　太子
仰願本師弥陀尊　助我濟度常護念
日数をてもを形人法代をてをれ列人とをかをち行　日
たくてをのいかをてをとをれをとをろ形すりをかをうたかを　日
一念稱揚無息事　何況七日大功德
吾待衆生心無間　汝能濟度豈不護
一をひも中名代をを形人る聲をけい長代爰法ものてをを　日

善光寺築

空海行状云弘法大師天王寺西門にて日想観を修し給ふ時俄に
小蒼海雲小たなびき給ひ彼小映して遠浦一如の観忽かうかよ
自覚す初の原連小開けて五智の宝冠頭上小
あらわれ三密の花眼あら小拝奉らるゝ
屏風の絵小天王寺の西門にて法師の舟小乗て
ゆくと小ふれくるかれりと書る所をよめか

金葉　ひるゝと佛とゝかる聲とかたらてやゝきゝ海をこぎはなれ　源俊頼

天王寺の西門にてよみ侍りける

新勅撰　ゝらゝ彼く入日はなれも世ゝ小ふれて西の門お彼ら礼　都考門基業

天王寺小まゐりてよみ侍る

俊後撰　西と思へ小ゝわりてそ世の國の雜波わたらい見るゝ　後京極

あの寺小戒師をしてとくてよゝ侍りける

同　今さゝ小ふるりふゝさむと彼ら多むゝ雜波の寺のゝ夕貝　同

月の小侍る上へ月のゝ天王寺小

こゝろゝをと閑てひつゝゝる

出家　ゝゝい小西かゝ彼く月新とたゝよゝも小君をゝゝん　西行法師

天信の氏殿面門後太輔天王寺小十首の寺よ侍りし小月前會舞

撰歌合　西ゝ彼ゝ月俱小ゝて引出の寺ゝ侍りし小月前會舞　定家

於雜波若舎即事

同　世ゝゝ公の塵も彼ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ法の浦風　同

九月廿日あすりの往天王寺へ參り給ふ小

伊賀入道為業ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ侍る

家集　君ゝゝゝい雜小月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ雜波わたりの秋のゝゝ　頼政

未本　日想観のゝゝ侍ゝ

千載　海小ゝ彼雜波の浦の夕日ゝゝ西小ゝ侍る彼りゝゝ　為家

未本　世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ海の入日ゝゝ雜波の海ゝ成ゝ　同

方便小法法實相

拾遺　雜波浮ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ流れあるまゝゝ法ゝゝゝゝゝゝ　慈鎮

同　法の國のあしけの駒小のゝれ涙小家思ひいるゝ小ゝあるゝ　同

同　法の國のあの八重ゝゝ侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ佛　同

同　法の水とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ雜波に小月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　同

脇檀小月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ日名姫玉照姫の三尼ゝ

引聲堂　西門の外　第側ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　釋迦文殊普賢　三佛氏安氏又皇ゝゝ子像慈覚大師像

の像ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

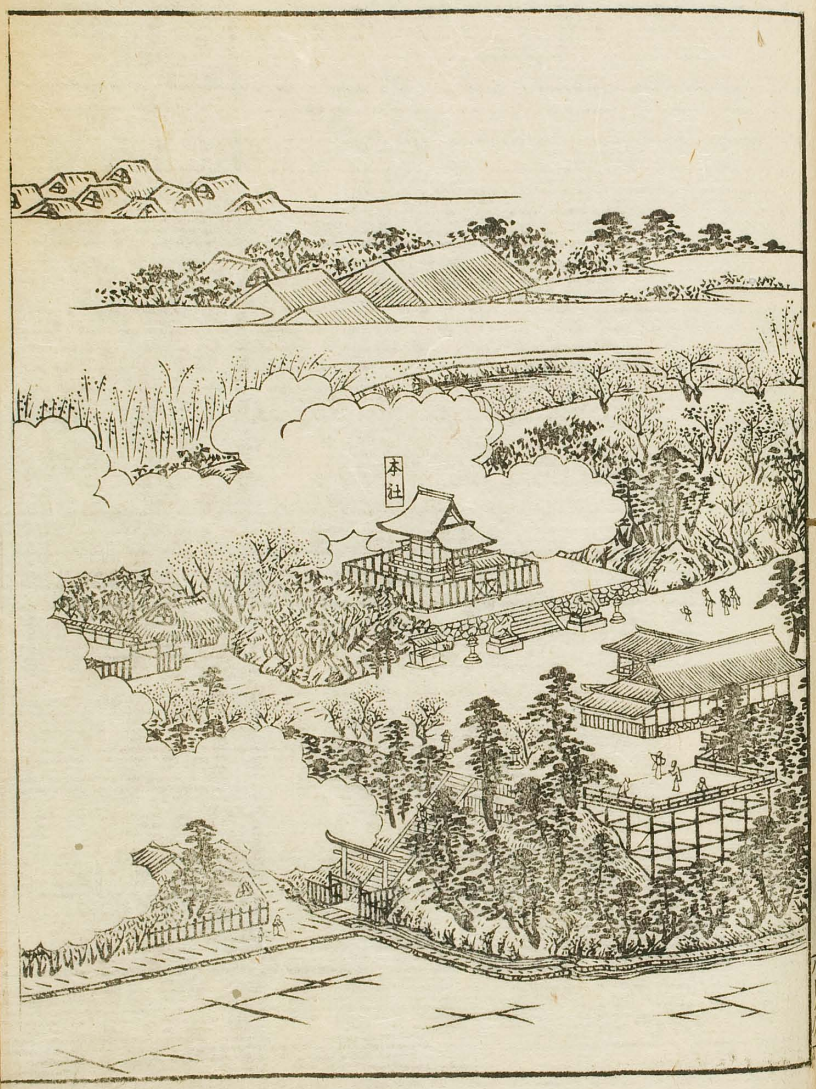
北側小ゝ　恵心僧都像法然上人像俱小自從

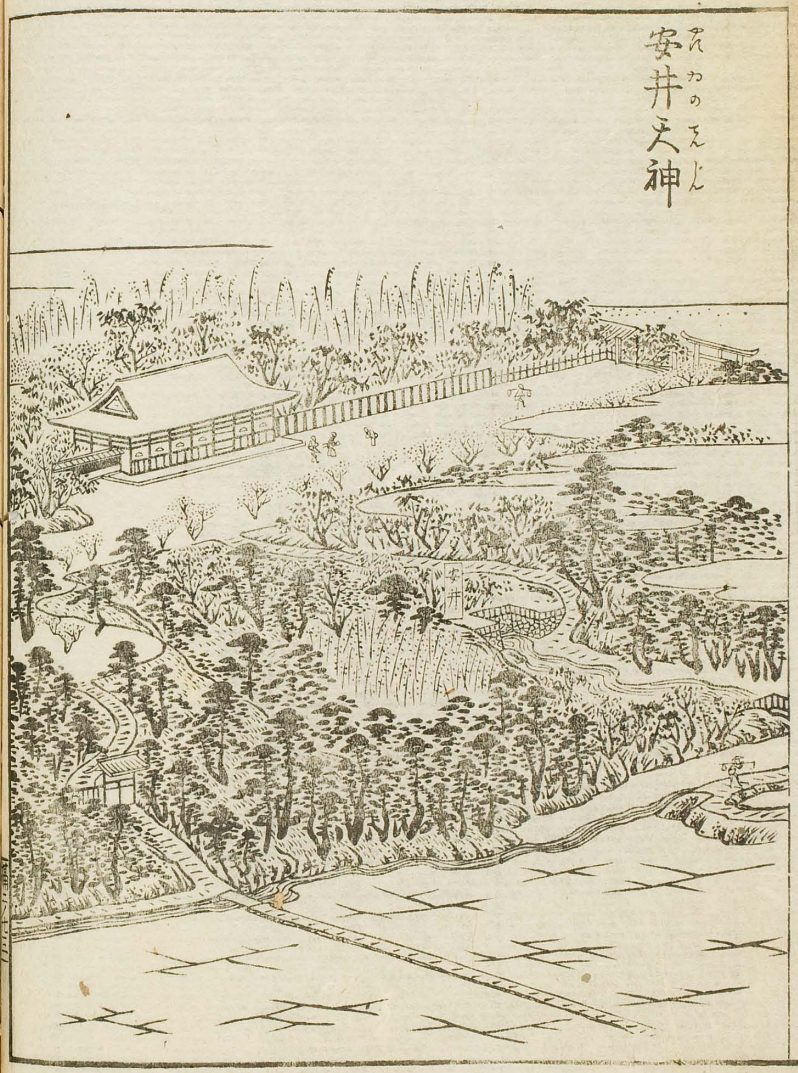
短聲堂　西門の外

九て引短二聲の聲明小別ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ堂の名小ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

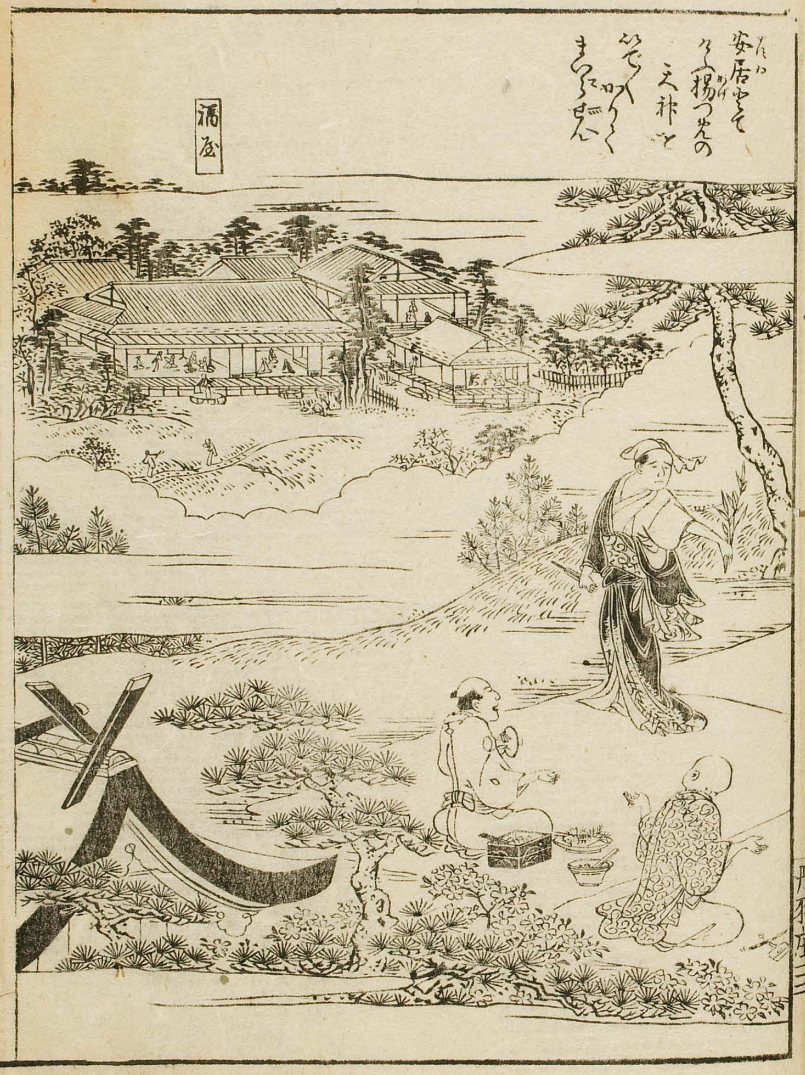
の二人師ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

知ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ通念佛ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ導師小任右那平野大念佛寺の寺勢僧正





安井天神


酒屋
安居中そ
々宿つ先の
天神と
ゆ
ゝ
ま
ゝ
ぶん
丹羽左三

安井天神山
花見
丹羽左三

○引導石　西門の外小あり武地の者死亡せば葬る時更小僧の引導を用ひ此石の上小幡向あり居て遠近の無常度の捷を三聲唱ばを俗称りされば信ある人は他所より も葬りてそなの引導小称りの風

○石華表　西門の外小あり原は衡門にして本て造れり其上に紀貫之和尚と為書しるなり其後定家卿も和尚に為書しるして寶庫小蔵む其和尚二首

水くきの流とはうれく落るもまれすぬぶ人やあらん　貫之

みくさの流にうれく水かうまれすぬぶ人いあれも　定家

衡門表題曰釋迦如来轉法輪所當極樂土東門中心の土いまを等說こと皇太子の眞蹟と云或曰小野道風の筆と云弘法大師くも三何れも其足此に按ふ古代の筆にて大師の筆感ぶ所大師の肉裏の額と多く書しぬ所なれ故

捨玉　沐カ品即是道場此國の俗故の浦乃大寺の額乃絡しそ因ぬ所なり

元亨釋書云

釋忍性　姓伴氏　和州磯城嶌人也　永仁二年小勅を授て大寺の管天王寺之主務に捨て俸餘益悲敬の二院を此寺大門之外に有衡門に鰐鉅木宏材歳久朽頽性出新意以石新之高二丈五尺堅確堂滑國人拭目云云

此文のみく石の華表は忍性上人の造立に依て度御宇永仁二年小勅を授けて此寺の勢と称す大門の外の衡門拒木宏材年久くして朽かと云ふ云ると上人石を以て造り改られ忍性上人と申す人れ國濟嶮嶋伴氏の子にして十一歳の時信貴山小ゆり十三にして雜鬘一十七の年東大寺の戒壇小のぼり其後西大寺の叡正芸蓮の弟子となり戒律を建長四年上人関東小鎌きの人此時家明寺時頼光泉寺に造建し武藏守長時極楽寺と建立ありて上人と為寺の開山と崇敬せられり都小ゆり天王寺小住して四ケ度の跡を慕ひて所々小療病悲田の二度に騰て貧人病者と施ひ人孫を養育して二十年の間小四万六千八百人に施恵せり小係相模守平時宗上人の慈悲に感して土佐國大忍の庄を永く其料小寄られ又て此上人渚國小ゆるて伽藍八十三箇所塔二十基大藏経十四藏國々の橋百八十九作りゆひ山州宇治橋も其一つなりといつりくいき

忍性菩薩畫明戒篇小作るり

四箇院舊蹟　悲田院　施薬院　療病院

悲田院者今洋所に療病院は今の陽院方丈其旧跡とも亦洋所に悲田院の旧跡東門の外小あり今乞人の宿る所所々療病悲田の二院南山の麓外小あり故小垣外の辨所今此号所所々小ゆに

六月十六日
勝曼坂
毘沙門参

本願縁起曰

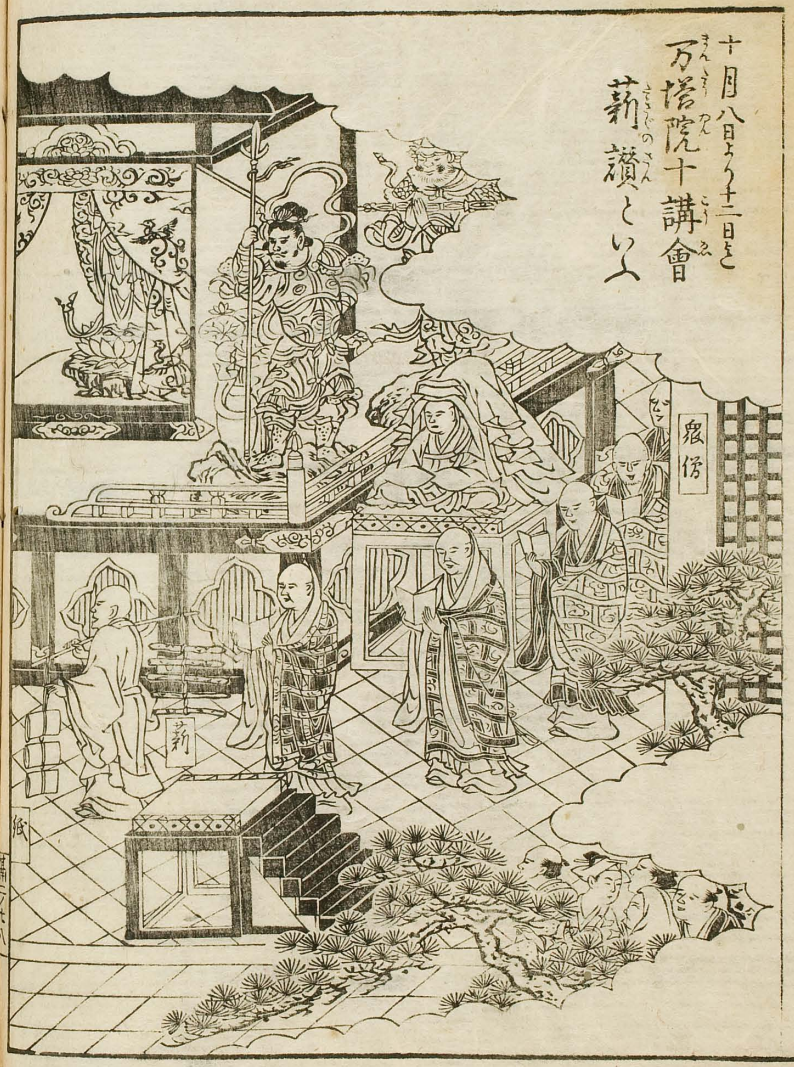
施薬院は是令一切の芝草薬物之類順方合薬
隨各所薬普以施與療病院は是令寄宿一切の男
女無縁の病者日々養育如師長父母悲田院は是
令寄住貧窮孤獨單己無賴日々眷顧莫令致
飢渴若得勇壯強力時可令役四箇院雜事
其養料物は攝津河内両國毎國官稲各參伴求
以是供用而已三箇院は國家大基教法の家要敬
田院は一切衆生飢依渴仰斷悪修善速證无上
大菩提の處也云云

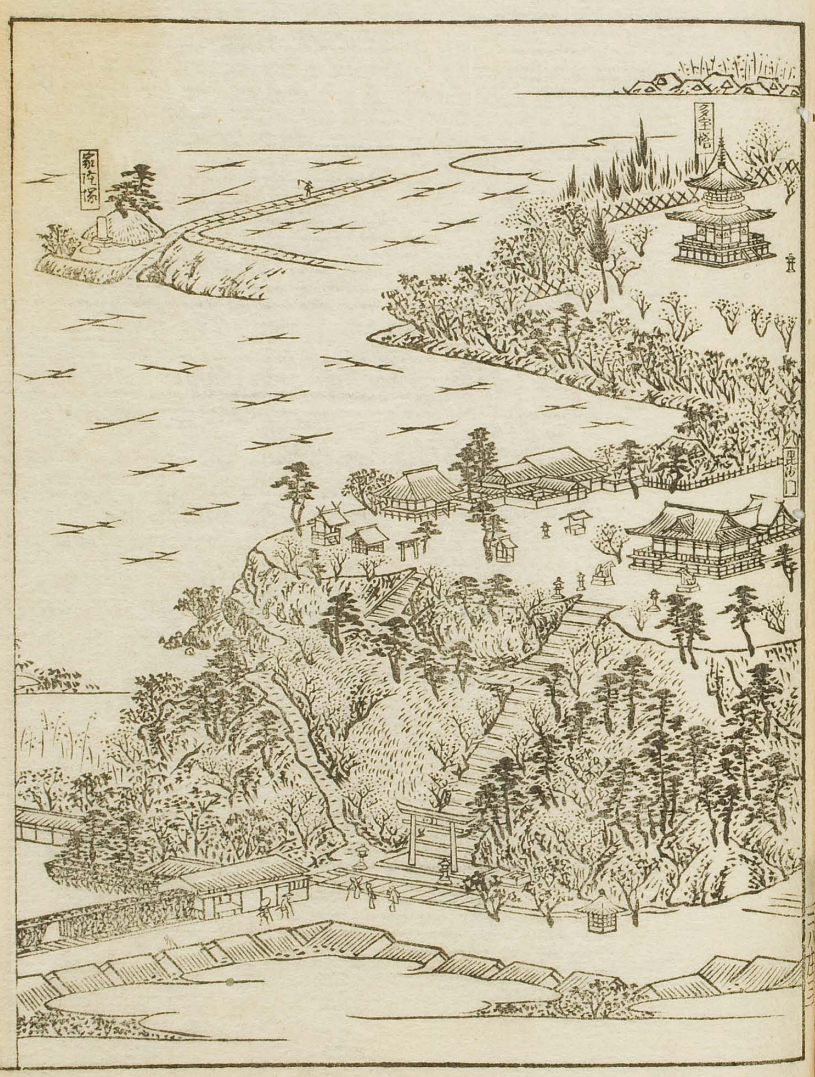
湯屋方丈　東僧房の小小あり中古南光坊天海和尚寄勢職の時造くらて小止
住せられし所と称して正月生身供とかくして請人
駒ケ池　湯屋方丈の小小あり正月七日白馬の節會式の時小
池にて駒の足洗ひ掌おれは池小名くん
上之池　蓮池の下之池　蓮池の東小あり　湯屋方丈の
あ小あり
東僧坊　宝蔵の側小あり古傳之僧坊西條三十四間式分つ事
四十八の本願誓攝衆安樂なる事式顯に形りしえ
西僧坊　東僧坊の西小あり　如て東西の僧坊は一舎利二舎利及び十二坊の
寺僧等居住の所形り一舎利二舎利の獅子山小聞へど或
日られ役義の形りして委は一之舎利出し二の舎利出しと人と聞く
る雖形り下　毎年正月生身供の時小堂司の役僧一の舎利出し
二の舎利出しとして
供物配分すと聞下

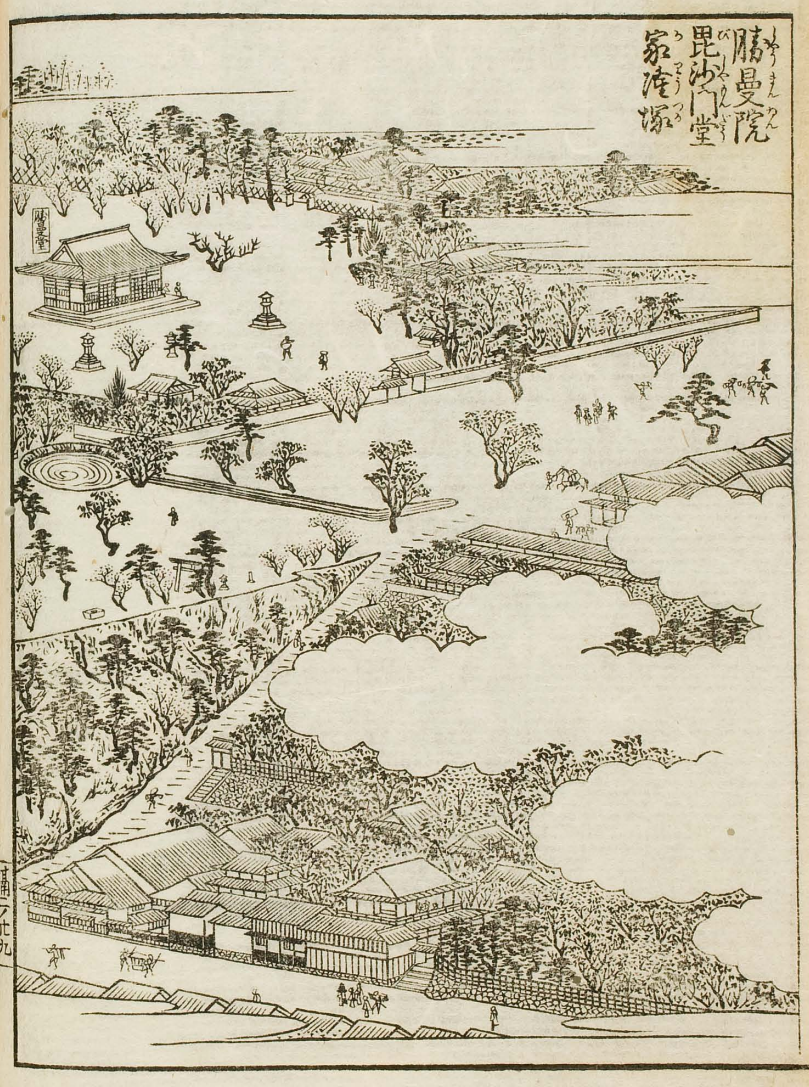
東門　門お河内街道之は門成は宝蔵俗釘堂と云は秀吉公再興之
之和の兵火小焼失形り敗地荒蕪形りて世小名高し

影向石　東門の外小あり四石の其一箇之
天照太神遥拝所形り
下馬表石　當山四門の前小あり下馬の文字は朝鮮の雪峯の筆之
寛永年中表朝の時書しむ
勝髪曼院　西門の北西小あり　愛染明王　安置たる仏道場小於て勝髪経
小あり　講讃あり故小名くん　毎年六月
朝日本尊式同扉は多寶塔　式中小あり二層塔なり
諸人大小聚と形せり　大聖金剛式安置は
乾社　王寺小祠小あり　毘沙門天　長式天七寸　鬼子母神　賦師まる俱小をるの御作
如意山神宮寺号
土塔會四月十五日夏終六月十六日むしは神輿式荒給へしし　神供式給へ
式式今は絶形り　白河院永保二年小天下旱は仏る天式荒岩小ふ
と称る小怨霊應あり式例小よる三代實録之貞觀二年六月十四日從天王寺　上
奏毘沙門像手持刀及塔形等拙鄽壇下置使看修法謝三怪異也ええ
秋野坊　西門の北小あり　當寺文殊三鄽と鄽して世々一山衛護の
家形り　歴代　勅宣　院宣　將軍家　祈願　施興文等数十卷
家小藏む　將軍等敬禮　結縁の寺社形り　舉は色のくに
抑此寺家の遠祖式祭る小皇をるの遊は小皇姉の寺式はくに皇
商遠の代人自王二十一代　敏達帝才四宮　春日王をるの長男則皇をるの
從父才形り　遊と崇りて當山寺護職小補せられ其をる中納言毛
野其をる中納言大澤上毛人其をる大人まで朝廷小置て當寺守護
兼は人殿后　勅式將て大人雜髪して當山小置り不朽の衛護
しして小皇度　秋野房と号はられより連綿として當時まで
て四十七世しを聞へ　湯屋君法小奏川勝の苗裔と書し
を證形り

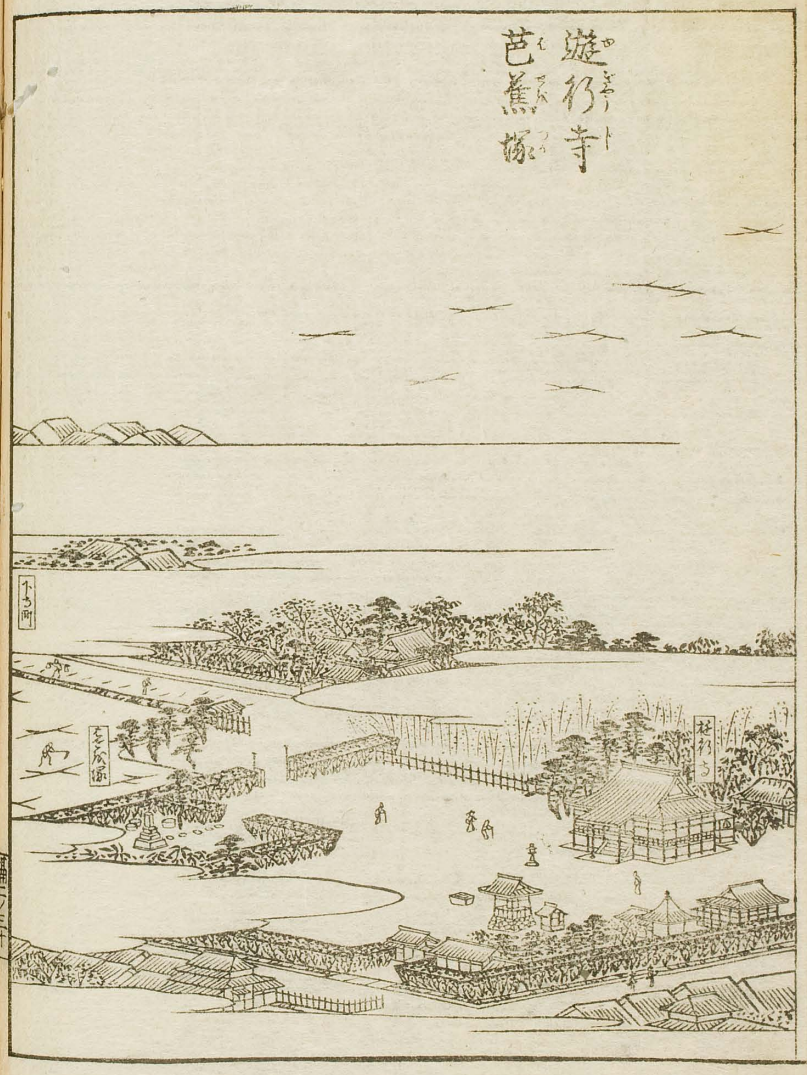
十月八日より十二日まで
万福院十講會
薪讃といへ




多宝塔
家康塚


勝鬘院
毘沙門堂
家康塚
勝鬘堂

遊行寺
芭蕉塚



なる十六羅漢像 御祖化坊内通場小安に入り什寶小古額宗近の名刀
一睡あり其余器に書度天井の画雲龍狩野古法眼の筆
妻戸の画三番叟も日華の筆なり瀟の繪耶靭盧生が狩野山樂の筆の
画所〳〵小多〳〵當坊書度に初メ榮白山の御車營と後さく小邦領に

○安井天神 相阪の上小あり祭神菅公名命毎年八月廿日神祭あり
と芝郡綾とうと今天滿宮と称して義小散公祭茶を置
の御府ちゝ小たゝ〳〵ひのゆ〳〵名あり坊内小連寺所と産て
明廿五日小祭役の連寺あり天皇神社天滿宮と綾ら称す
車雖々小あり 安井 社頭小あり什色
七井の其一留と

○土塔宮 南大門の外小あり祭神半頭天王本地佛小茶吽地藏皇名
の三像社安置に神寶小舞樂の面あり悪魔牽伏の面と
毎年四月十五日午刻小土塔會あり舞樂を奏に什土塔宮を郷中の生
土神として崇世すて土牽と〳〵美藤の祭礼して畜山の衆徒石の藥
表の左右小樹あとを有て見あり〳〵
土塔の奮蹄次下小見〳〵

○万代池 南大門の外今田圖と形る絵の初小篇万代の池の亀の甲小三
玉と綾ら〳〵涙に什池の下られも舞樂ら形る〳〵
チリヤクリの橋 什側小あり 後德街道 南大門の外東へ通る細路とり後德丸河内國
高安より畜山へ道なり道なり也

○庚申堂 南大門の南小あり 青面金剛三尸梵天帝釋四鬼藥師如来
如意輪觀音地藏菩薩等社安置に庚申の日毎に人大小
非僧と丈武帝所字大寶元年正月七日庚申の日畜寺住侶正善良民
郡郡郡

合法辻
焔魔堂

六万体の
地蔵ぼさつ
ゆきくの人を
たすけて
たつふ伝
よろる
大エの

賽

丹羽桃溪

わかさふ
地蔵
わかさ
ゆきく
たすけ
ゆく
ぼさつの
ちかへ

一心ち

茶白山

茶臼山

神営計畫
之山日域徳
草生死間畫
殺一時三十
第功成耕馬
凱歌還

隼山

四天王寺法華略記

○正月元日寅剋
講堂秘密供　辰剋　寶藏朝拜　巳剋　たゝ堂法華　四智讃　祭文　○舞樂
慶雲樂　老君子　万歳樂
延喜樂式日三十膳の饌を献ず
五節供　午剋
金堂舍利講　五段式　伽陀　○音樂　平調　春庭樂　陵王　柳花苑
賀殿破　胡飲酒　酒胡子　武德樂　金堂の御舍利
諸人小結縁せしむる毎日午刻形ゆ一夏
百日の間を夜別に是と舍利出しとり
饌堂万石米　酉中剋　祭文　世俗これを　六時堂重盞祝儀
はらう初とり
六時堂修正會のお小出仕の役人膳を儲て壽ぎ
口役とり米を取て樂人双調の巻取を献ず纔形ゆ
九日より十四日まで酉剋　四箇法用　初夜導師　大職悔　後夜導師
六時堂修正會　三十二相　○音樂　平調　老君子　放蓬樂
甘南　桃李花　黄鐘　打毬樂　黄鐘　鳥急
平調　太食調　音取　泰平樂破　泰平樂急　後日音樂　打毬樂　老君子　長慶子
法事の中小堂部の役人七日こうとり米を勒て給と方化法
あり十四日の夜八半王と柳の枝小俗て御堂の内陣よりおさゝ小
糸指の人取りて民家の纔に付燒あげ
そて法事の終小堂の場小ゐて解火法しく形ゆ
四月十五日　当寺三藏　たゝ堂生身供　唄　散華
花田坊修正會　の坊形ゆ　講問
○音樂乱聲　慶雲樂　老君子　五常樂　長慶子　此時七十五膳の饌を
献ずる人白坊小立形び　枕前より御膳法捧げて階の下小至る所の

堂上小蹲居てこれを傳供して宮おゝ伸れい法事始ゆ形ゆ此生身供
とうとうたゝ堂の御誕生の祝賀を法會終れい堂司の役僧正面左の
花除よりて三綱一舍利出一二舍利出一或い左中央の供僧坊少將の
供僧坊ゆゝ高聲小庇僧の従者と呼出一配當の供物と渡す形ゆ
六日戌刻　初夜導師　大職悔　後夜導師　三十二相
たゝ堂修正會　○音樂　老君子　桃李花　打毬樂　鳥急
七日戌刻
六時堂白馬節會　出鉾　相職夏　馬役の者　駒ケ池て駒の
足洗ひ　牽おす形ゆ　駒ケ池おゝ立ち
八日より十二日まで戌刻　初夜導師　大職悔
楠寺修正會　後夜導師　三十二相
十一日戌刻
金堂手斧始　正月九月十六日午刻
金堂大般若轉讀
十六日卯刻　東中堂の西松井直陽　十七日午刻
射場弓始　の前小ゐて形ゆ　金堂本尊秘法
十八日酉刻
たゝ堂踏歌節會　法會の次者修正會小同事始て當寺ハ　禁庭の
行事とうのさゝ事めりたゝ堂の故官ゆ四人
其由緒と　毎月廿二日午刻　法用寺　講問　五段式　伽陀　職法
たゝ堂縁日法事　○音樂　盤渉調　正月調子
擬桑老　白拍　輪臺　青海波
蘇合急　殿樂　千秋樂
毎月廿五日
安井天神連歌
○二月朔日より三日まで酉刻　正月の修正會小同　故小者小異
修二會　南法東大寺の二月堂の初ひと同事
四月　六日酉刻　法事音樂　正月
芹田坊法事　たゝ堂修二會　修正會小同事

八部と表する形なり抜後日法華舞樂ありて後酉の刻くらい小還所又聖霊院ふして法華ひろめ終り又四日巳の刻小御上帳所手水とりて事あり足いたる子ども華の楊枝の所新に時古時堂ふおるて開帳あるあり則三綱職秋野法下右の尊前へ進ミ御厨子の戸帳を撥げたる子小ども御手水の式あり尤秘訣ありて委く知る事能ふ所ふ故實ある事終りとそ此時當山の什寶京不見留とありて樂人貝寄風

二月の粮小住右の浦へ碎貝と多く吹うれと奏に

あれの果と聖霊會といへるも此時終るべし

あれの當寺の後僧侶衣と着ー濱辺小お砌貝と拾ひ取聖霊會の時舞樂小飾る花小作る終り此花を則曼陀羅華とて赤き紙とも刈てなを大きく見事小造ら此華の塵ふを役僧生駒山小登り此山の巖の苔と取来りてこれと分る又此日龍神の核浦とり事あり又く故實あり遊終り

廿二日酉刻

左子堂法事　月並の法事正月の如ー此月ハ聖霊會終て初ら

○音樂　平調老鶯子　倍臚　甘州　三鼓塩

○三月二日未刻

経堂経供養　導師　呪願　惣禮　讃　法用等　迴向

○舞樂　撥鉾　平調　迴盃樂　一越調　白柱　盤涉調

賀王恩　大食調　天人樂　大食調　万歳樂　平調　白柱調

延喜樂　長慶子　大食調　甘州　平調　林歌　柏平調

納蘇利　王　一越調　平調　経供養　法用等　迴向

○此日ハ震旦國ふ経論渡ふ日ハ毎年

六時堂温樂會　法華温樂會日ハ舞樂　黄鐘調

六時堂聖霊會　乱聲　安城樂　撥舞　蘇利古　水樂

迴盃樂　承和樂　地庭樂　陵頻　胡蝶　賀王恩

天人樂　鳥向樂　万歳樂　白柱　林歌　安宮樂

長慶子　甘州　春鶯轉　退宿德　泰平樂　狛鉾

二ノ舞　桃李花　登天樂　万秋樂　地久

喜春樂　散手　三臺塩　皇仁

白濱　輪臺　貴德　陵王　納蘇利　撥桑老　新靺鞨　蘇莫者

青海波　貴德　陵王　納蘇利　還城樂　拔頭

崑崙八仙　信臚

いなくの朱明より法華始ー四八舞樂の次第も右小ろ

ろ〻ろ今ハ畧されてそく始ー年小ようて興小ふ

夜の刻小令堂の庇會ありて佛舎利と興小ふ

樂人乱声とそ叔佛舎利ハ金堂ようを子ハ聖霊院より六時

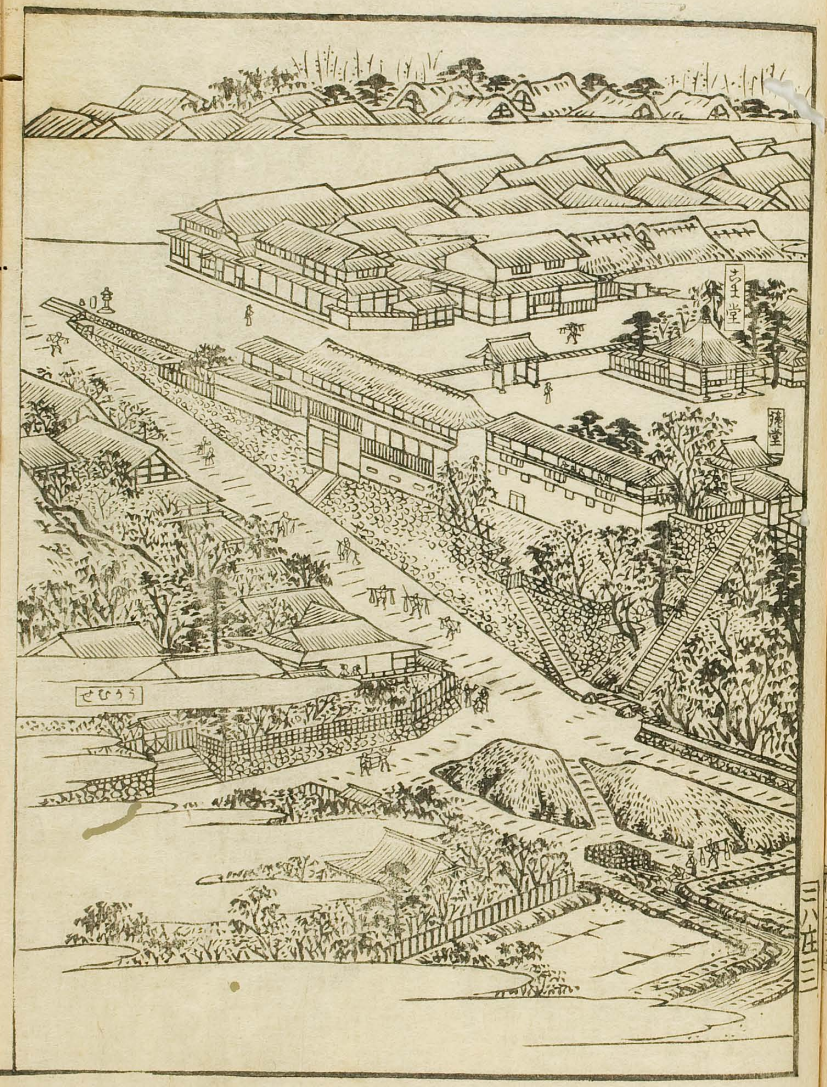
堂へ臨幸あれば衆徒三綱職ハ御服と着して殿と出ー者とふ

ハ花とかさー僧人を樂と奏ー移くの供奉の人々粧ひ篝ー

く其中小ふ〻くの面とさげて特ふと八部衆と名つく天龍

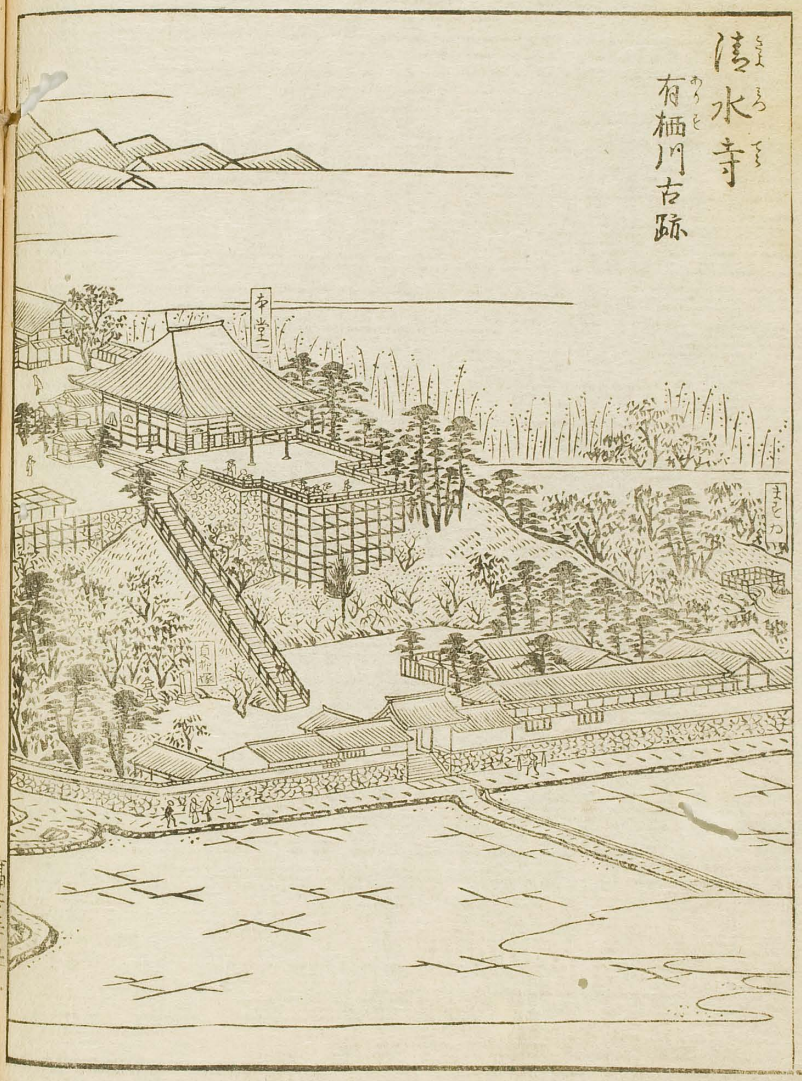
俗人樂と奏し經堂を子堂と行道あり彩りを子堂
面の座上して舞樂あるられと俗小椽下の舞とりと
廿二日 左子堂 月並法事あるべし。音樂 三月雙調 春庭樂 蝦蟇踏
八幡 青海波 新羅陵王 鳥急 武德樂
○四月四日 知刻 講堂結夏開闢 法用寺 仁王經法則 老君子 万秦樂 扶南 慶雲樂 長慶子
四日夜刻 金堂結夏開闢 錫杖 懺禮 法華懺法 迴向
八日午刻 講堂佛生會 法用寺 法則 甘州 林歌 陵王 納蘇利 万秦樂 延喜樂
法事滿座の後小頭役人 桃色指の下帶して相撲の合と
ちらしられと豊後相撲とり人百年祈中絶あり近年始 同
十五日午刻 土塔會 南大門の外土塔宮ちあり。舞樂 万秦樂 延喜樂
陵王 納蘇利 ちうも豊後とまひあり
廿二日 左子堂 月並法事。音樂 四月黃鐘調 亦白桃李花 散吟打球樂
喜春樂 河南浦 平蠻樂
海青樂
拾翠樂
○五月十六日午刻 金堂大般若經轉讀 十七日午刻 金堂本尊秘法
廿二日 左子堂 月並法事。音樂 五月盤涉調 採桑老 白柱
蘇莫者 千秋樂 蘇合急 竹林樂 延天樂
○六月十五日巳刻 講堂蓮華會 阿弥陀經
左子堂 月並法事。音樂 六月一絃調 迴盃樂 十天樂
地藏樂 陵王破 菩薩 彩德橋

○月十五日午刻 講堂一夏結願 法用寺 法則 ○音樂 平調 万秦樂
延喜樂 陵王 納蘇利 一絃塔 導高麗の
滿座の後豊後 廿二日 左子堂 月並法事 ○音樂 七月平調 勇勝
相撲あり 慶雲樂 万歲樂
表半樂 林歌
小娘子 王昭君
○八月十九日 安居天神菅原祭 廿二日 左子堂 月並法事。音樂 八月平調
延故州 万秦樂 老君子 鬼頭樂 春楊柳
扶南 殿樂
○九月朝日午刻 金堂舍利講 音樂 九日午刻 十五社神拜 ○舞樂 万秦樂 延喜樂
十五日酉刻 六時堂念佛會 陵王 納蘇利
相撲あり 慶雲樂 阿弥陀經 ○舞樂 平調
万秦樂 延喜樂 甘州 林歌 陵王 納蘇利 振鉾 還城樂
六表左子六時堂〈隔案〉あり月の表ゆれ宝寿〈〉て殊勝
ゆ〈ゆ〉て高山の盥解會 聖靈會 念佛會 古れと三大
會と雖て厳重ちう法會あり 念佛會 中下 刻ゆ
十六日午刻 金堂大般若經轉讀 十七日午刻 金堂本尊秘法
廿二日 左子堂 月並法事。音樂 九月盤涉調 採桑老 白柱
廿八日 輪臺 青海波 蘇合急 晦日酉刻 石華表神送 宗明樂 鈴氣褌脱
金堂舍利講
○十月朝日 金堂舍利講。音樂 朝日ちう七日間 棚所本地供

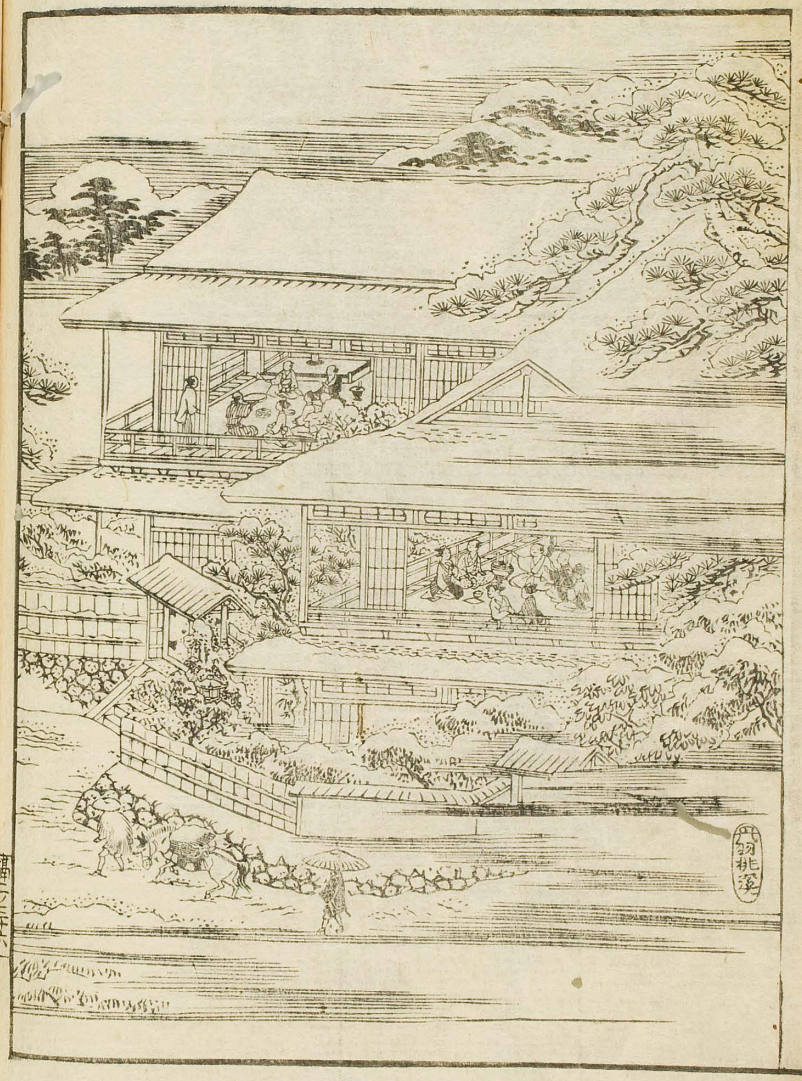


清水寺

有栖川古跡



浮瀬
浮瀬とて名とるとまるめ相坂の
しるべ川ふうろう
相坂の水ふ
紅葉の
かげ
今の世人
酒とたの
瀬
丹羽庄三


丹羽桃源

貝觴 銘浮瀬 十二穴
七合半入

君が為

表 裏

裏 表

裏 表

裏 表

裏 表

裏 表

裏 表

裏 表

服巾唐織 或云長曽我部氏陣羽織切

幾瀬 一合半入

吾背子

瀧音

春風 和蘭

表

裏

表

裏

七人程の大觴 六升半入
多くの人数二人飲べし

直径尺余

表

裏

浮瀬什物

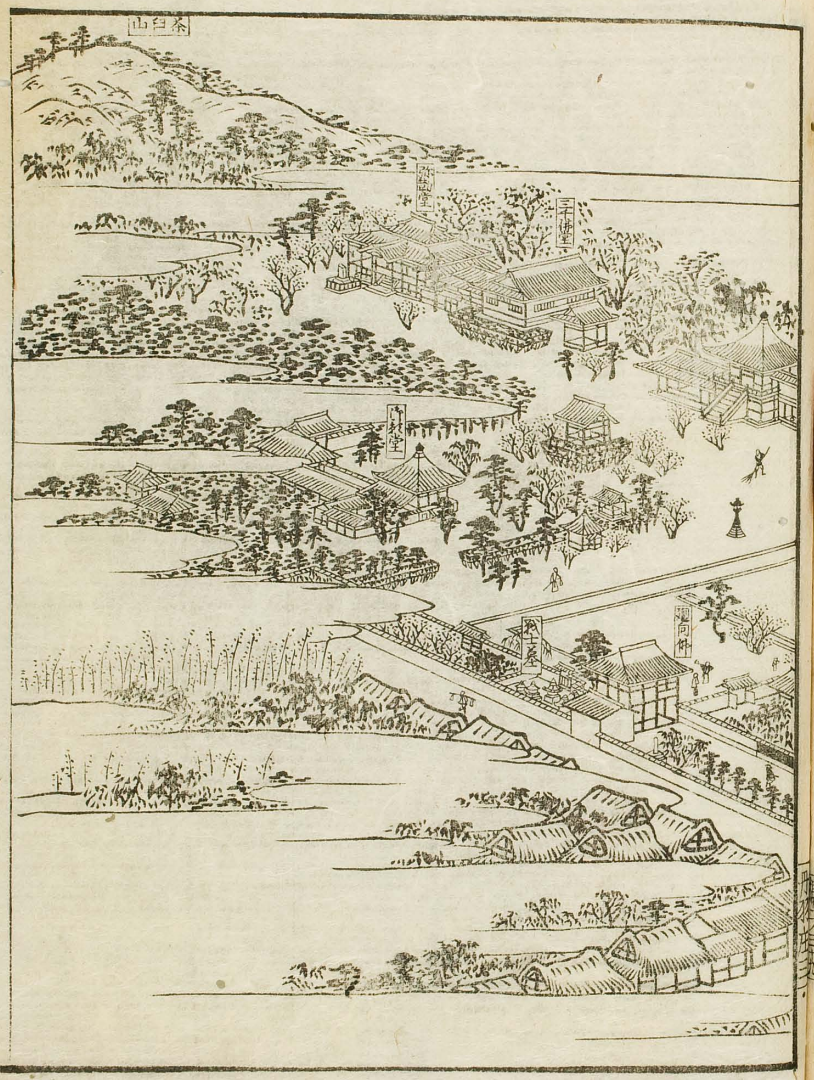
糸底壹升入

八日より十三日まで酉刻
万塔院十講會　法用等　講　問　初夜導師　大職悔　後夜導師
。舞　樂　万秦樂　延喜樂
長慶子式會の中日小菊の瓔珞とり〻まきあり法華の間小堂仕の後伶人夜
と着し菊と榊ひ武八菊の折枝竜小挿花と入為ひ持て堂内とめぐる
式時小風ハ甚言式　法華経と家得し手ハ菊川けて唱人形り
くゝ仕てゞ得しとり手と長く節川けて唱人形り
廿二日
太子堂　月並法事　。音樂　十月盤渉調　採桑老　白拍
鳥向樂　竹林樂　感秋樂　弟　扶樂　延殿樂
廿三日より十五日まで酉刻
左子堂三十講會　法用等　講問　両座　伽陀法事　講日
。音樂　老君子　扶南　長慶子
三十講の中日十月廿日巳刻。舞樂　振拝　万秦樂　延喜樂
式日も菊の瓔珞とり〻まきあり法華の間小堂仕の後伶人夜
式會式と釋尊雪山の昔を思いて
佛恩と報ぜんがゝの法會形りとて
十一月朔日午刻　十三日より十五日まで酉の刻
金堂舍利講　。音樂　講堂佛名會　法用等
大職悔　後夜導師　法則　佛名経　。舞樂　初夜導師
万秦樂平調　延喜樂　相壹越調　長慶子　舞　新調　十天樂　舞　新調
十五日午刻　大食調
金堂新嘗會　其歳の新穀を本尊小御る形り奉るための祭として
禁庭ともあり又本根原小　用明天皇三年より
始り奉ると神代より事ときれり日本紀も天照大神
新嘗きこしめすと見えたりと書り　。音樂あり
廿日午下刻
左子堂新嘗會　。音樂あり　廿二日　左子堂　月並法事　十一月盤渉調
採桑老　白拍　輪蕃
青海波　漢　莫者
宗明樂　千秋樂　廿九日　僧坊大師講

十二月朔日
金堂舍利講　。樂あり舍利講ハ
廿日酉刻
左子堂修正會　法用等　初夜導師　大職悔　後夜導師
三十二相　むかしを月毎小古都日小法華経勝鬘経
と講ぜる法指の軍法名と現在縁小ゝ死亡者法過去帳小記〻して
六日の廻向あり〻とゝ松泉式部式寺小詣てゞ死魂小我名と記〻して

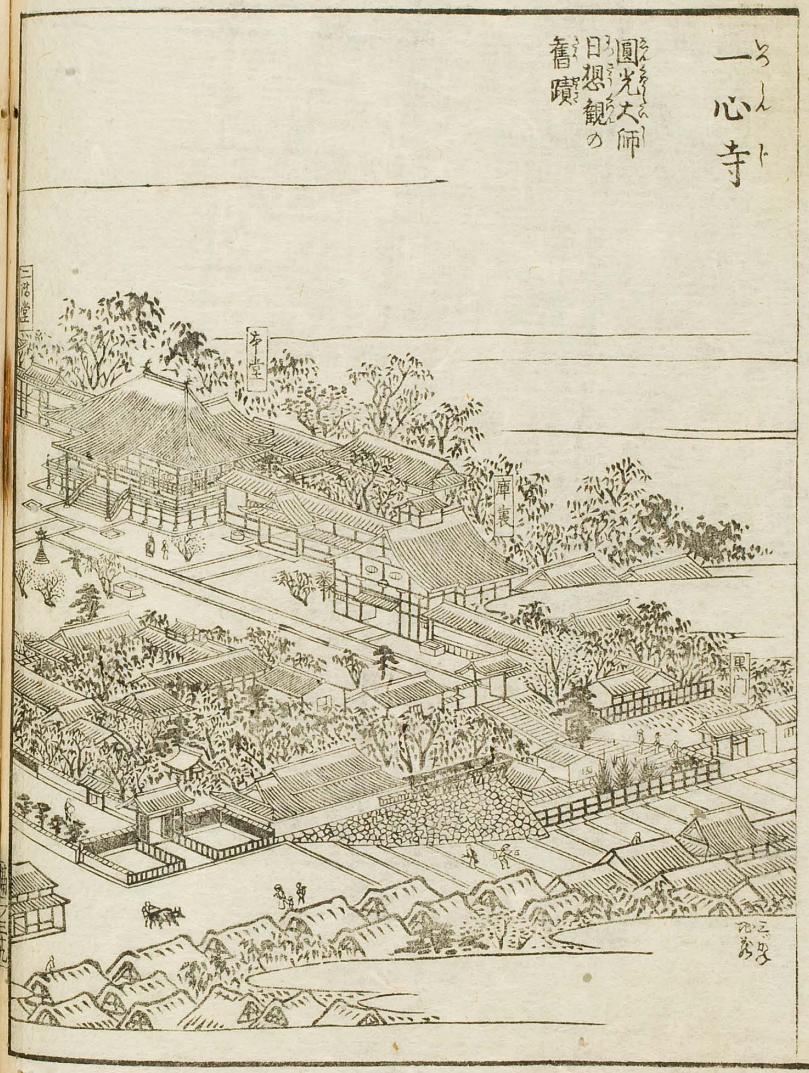
梓弓くりる色〻ゝを思ひよとうねてなき身の教小入る邪

廿二日
左子堂　月並法事　。音樂　十二月盤渉調　老君子　相府蓮
三蓋急　廻鶻　皇麞　扶南　鶏德
ま當山を一ゝ有餘歳の古寺形れゞ由緒古實多くして筆ちる小際退ゞし
特ゝ舞樂の伶家世小名高く　朝廷小ゝ奏〻て奏〻式花刹常小妙曲さを
鸞鳳の聲ゝ牽の花小響き月下小落くちろ凄然ゝて伊吾の遊小似ゝり
名蹟ハ三水四石名の桂砂中の舍利虎ヶ門の服部猫門ハ元朝小三色鳴ゝ雲水塔
の幡龍の瓦金堂の天邪鬼の鳧花兜雌雄の鷹の貝吉鳥十五夕月れ橋皷撥蓮撥黄
箔調ゝ仏丹楓天王寺蕪菰鋸南大門の牛市春ハ梅旬ゝ鶯鳴帰れ彼岸ゝ
の引袖引時正の月想觀ゝの東川り極樂の遥拝温槃會聖霊會と又仏ゝ柳桜と
ゝ咲て雑仏の形と昔小ゝ生遠國ゝ来て法と又ゝ仏ゝ御城ゝ小奉寺ゝ筆の外ゝ



一心寺

圓光大師日想観の奮蹟



坂松山一心寺高岳院　紫臼山の北に小あり浄土宗鎮西派知恩院に属す
本尊阿弥陀佛　円光大師九五歳の舊蹟其一形り
毘首羯摩天の作る像三尺又方丈小善光寺の如来と擬し一光三尊の金像佛と安置す
二階堂　本堂の南に小あり弥陀釋迦の二尊九五菩薩と安置す
世人菩薩堂といふ
三千佛堂　二階堂の奥に小あり五劫思惟の弥勒堂　三尊堂の南に小あり
弥陀及び三千佛と安置す
御影堂　弥勒堂の側西向に小あり宗祖圓光大師の影像と安置す
世に横取御新と称す毎年正月下旬御忌法事あり
大師廟所　法然上人の廟所
駒繋松　当寺書院の庭に小あり大将軍頼朝の御時茶臼山の御陣営に御成あり繋せられ其松なり小瘤多と繋せる傷の痕なり霜雪と厭ふ蒼々として千代の色と見せ
半高丈計年経累なるとい
里門　当寺の表門に御城玉造御門　御代と共に小破衆の老に
拝領其時より黒色形り　中門　本堂の東に小あり三像丈緑
弥陀尊迴向佛と安置す
鎮守　愛宕権現祠に将軍地蔵と安置一社
天照皇神　春日明神　八幡宮　祇園
古墳　本多出雲守忠朝墓元和元年五月七日天王寺表に於て戰死
辨三光院殿岸譽良玄居士と号す是本多平八郎の舎弟
次下に小四人忠朝家臣墓九基何れも我死く小野勘解由塔　青山
五左衛門塔　加藤忠左衛門塔　大屋作左衛門塔　山崎半右衛門塔
中根権兵衛塔　石川半弥塔
田村十兵衛塔　大原長五郎塔

抑当寺を宗祖法然上人日想観を修し給ふ霊場なり文治元年の春天王寺の寺務慈鎮和尚上人と招請ありて方四間の艸庵を結ひ新別所と號し勅願年号を賜ふ　後白河法皇天王寺の五智光院に行幸あり
法然上人
後白河皇御製
て切宮とし給ひ新別所を輦とし給ふ上人相共に日想観を修し給ふ其砌御製并に上人の和歌あり

阿弥陀佛とゝなへ外に法の国乃形はのこるなりけり

雖彼浮入の日を深むれとゝなへ小南無阿弥陀佛　法然上人

あれ上人の真華りて雖彼名號と星霜年を積て國群騒擾の時大小類廃に慶長の初然蓮社本譽存岸上人去る小来て中興に京江三州の産小して関東修学の時　将軍家御取立被れ下総国佐倉法光寺に住し兵隠遁の公原く檀林と辞し圓光大師の旧蹟を訪ひて当寺を再興し一千日禁足晝夜不卧の念佛を修し一心帰命を以て寺號とせり因五年の秋
大将軍当院小入御し給ひ本譽上人勅願堅固形る事を賞嘆し給ひ

造寺資縁の望と命せらるといへども境内不殺の外更に所望なしと雖
因茲殺生禁断の制書を賜ふ山内の古松小南馬沈繋せられ千歳貞松と
祝せられ地名を相坂といふ即其序に有今上障子の板面に尊翰を摂
られ坂松と寶額を賜ふ同年二月七日御幼息　仙千代君　早逝
しまゐ寺譽上人御焼香導師なり法嗣と　高岳院殿と贈号しまる
院名を宝額に遂て賜ふ元和四年領主左政所高基院殿当寺に御
しまひ制書を賜ひ黒印を副御後見本下宮内少輔折紙を賜ふ　笠寺記
当寺書院の側遠州の三方明の板寄屏は大坂御陣中より此に移る客殿
縁側の板戸は永徳の筆にして表は梅に錦鶏裏は芦に鴨寄屏の襖は
狩野常信の山水は鳴軍の屏風を上樂の筆什寶に第一に
寶額第二に雑陀名號　第三に大師直草行の弥陀名号両多口に筆と含
めひて三行一時に書めり紺紙金泥にして左の方に字に日の丸の名號は
乘法盛七回忌の時これを大師書しまゐ弥陀三尊佛は聖徳太子自画冒影

六字名號は恵心僧都鈴振如来に同化香合の勢至菩薩は大師の守本尊
親鸞聖人像張子弥陀霊夢の如来女人成佛の鉦元祖往生要集講嘆の
御影を夫座信ずれと画くを京問者の図を勝法坊の筆に諸宗高僧賛
書の弥陀経は　将軍家よりの御寄附日想観の図を左佐光茂ありと書く其外
寶器什物に小器は書院より西方と見りせは須摩浦明石厚浦嵯峨山遠
小て蒼海小夕陽と湛三季春秋時正の日を今小松て日想観院練の念佛怠
慢形　實小大師舊蹟の一貫なり

荒陵　日本紀云　今茶臼山とり人形とそれて異名なり慶長元和の頃
御陣営と称る荒陵の獅は　仁徳天皇より前の号
仁徳帝五十八年夏五月　當荒陵松林之南道
忽生両歴木狭路而赤合　五　五

雲水坂　天王寺の南小あり此地の念佛寺小近世雲水比丘中興して弥勒
佛と安置坂小雲水の名あり寺内小湯屋井とり人あり温泉あり也
土塔古跡　天王寺南門土塔町　四天王寺と称し皇太子の御時震旦国より渡て南岡
経論自有と聞れて土塔と築て納る人後世寺と称して
山土塔寺と号し寺号は太子御作の弥陀佛長三尺三寸の像と安置又當
山の由来は黄門定家卿の詠歌に八八世真観法師寺覚如上人小坂入
浄土真宗とする其後蓮如上人石山御堂御建立の
前ならくあれ止住しまゐ小世の人土塔御坊と称し
竹本義太夫墓

阿部野
王子権現
大名塚
小町塚
經塚
大名塚
經塚
小町塚
王子権現

法師の菓好
法師い乱れ
さけくの間
の余婦人
故郷小者
と学び業は
くるく楚詞
六義を吟ず
沈湎と飽き
法師の道徳と
父〜神明と母
と〜和と友と
たれい自然の
菓好の徴
し菓好師
の道徳〜
ちんや
菓好の徴〜
むーろ人のあ
むーろ目のある
丹羽桃溪

六万體　級天王寺郷中小字ならの石像あり　諺云聖德太子六万體の石地蔵と鐫て古迹小亟あり　とぞ今も掘出る事あり

毎年十一月十六日　太古石佛小生綱と供し　頭小豆の粉と塗り　蜜柑と

繰餅と飾て供養し　日夕方うい藁火と焼て石佛と黒くし　明年のく

雛して　祈うられと道祖神　祭るうしろみ　接ぎる小これ道祖神の火焼なるべし

神祭は　後田　命　家　地蔵菩薩　天王寺の化佛　二三日　祭る

里の　繩　小引　生素の人　天王寺の化佛

おなじ子　とらひて　目　供あと　頭

小供　門の　より　祭　土人　泥　祭ひ　勝曼

の東の　と　六万體　地名　祭　謂　寺　七月

四日の　四隅　地蔵　遷小　祭　面　紅粉　塗

他　の供　軒　祭　祭　祭　祭　祭　祭　祭

風　駒　穂　神　祭　祭　祭　祭　祭　祭

炊　焼　里　祭　祭

庭火のたくひ　ふんち

ある人問て云六万体の石佛皇太子の御作と云　況れば準延の日より四十九年

の堯御の日まてこれ　小から　せ　ひて　一百小三體　まで　小　と　と　て

親　の一矢　の矢　六十　六万と　形

相坂清水　清水門　の小あり　古七名泉の其一　坂清水　清水

清例　て四時　減　古所の用水　泉水可形

合法寺　相坂清水の　寺の學　寶　學校　古墳

三箇引導地蔵　一心寺門の小側　地蔵菩薩

牛市　海藻着岡より牛　牽て　市　古市今は絶て　牛

憑　の　牛　と　おれ　是古昔の遺風　其外天王寺の名産　蒲鉾　鰹等

齒神祠　天王寺東門の小あり　祭神　祭　内佛小

茶所と　人　齒　祭　祭小　霊　應　ら

崇峻天皇社　天王寺東門より四町　堀口　古　の生土神

例祭十一月十日　古所小　柏戸　春　秋

蘆間池　四天王寺の東北小あり　世俗　毘沙門池と称し

由縁　詳

夫木　あくれあり　池の池乃　多　小　表　と　る　虫　け　た　ほ　の　ぬ　く

同　浦　ら　れ　河　ま　の　池　乃　水　の　色　は　浅　み　ら　小　と　春　は　見　く　る

同　何　と　る　れ　芦　間　の　池　れ　く　祭　縄　人　く　ぶ　し　の　小　世　小　海　ま　え

阿倍川　今の　阿部　村　と　う　形　古　の　今の

万葉　街道　筋　い　う　し　の　海　濱　形

夫木　阿　部　の　浦　う　れ　も　む　石　小　ま　な　波　の　ぬ　ぬ　く　古　ら　る　ま　と　形　ま　る

風雅　た　ま　ら　な　め　鴉　山　の　夕　嵐　小　旅　れ　多　河　形　れ　古　表　波

夫木　あ　寓　の　岩　う　河　波　の　ま　る　く　て　位　も　き　ぬ　の　鳥　ま　く　形

王子権現祠　河郡　阿部　村小あり　祭神　若一王子

帝京　紀州　熊野　まて　九十九の一

天王官　同　村　あり　祭神　崇峻天皇

古所の生土神

中務卿　親子

伊勢

中務卿　親子

ふん

淡人

藤倉右官

文學まつの下向かるく
藤棚や
西の覗も
早志れ
護摩酒ふ
酔つく
あばれ
ぶく

小堀口
松屋亭

安倍野　今阿部野と書は天王寺の南門より住吉に至る道なり

去程に十日の暁六波羅の早馬紀州熊野切目の宿に馳付て清盛いたと同じく去九日の夜三條殿へ夜討入て御所ならび焼拂ひ候ひぬ少納言入道の宿所も焼拂なと候ひしかは門勢の馬頭義朝に相とらひて當家滅亡の謀と存ぜ候ひ世は清盛公に下向を企れ中務卿親宗朝臣當国増小使と云ひは兵二十騎ばかり陽成院堀頭宗重北騎にて馳ぶれば百餘騎小成小名うち小悪源太義平二十餘騎にて安倍野小待と聞へ候ひ清盛公に勢にて大勢小遇て討れん事を念かれ候ひ是より四国へ引き勢と催して後日小松へ入る也宜へ重盛卿に仰られ候ひ事延引小成ち定て當家滅亡の由諸国に宣編旨成候へ後悔も無益なり多勢と以て多勢と討事は古の業なり多勢と以て多勢と亡ひ古鞠の奥儀なり候ひ多勢なりとも馳向て戦ひ敗小せば即時小討死をすんぬと後代名を腐さ何ぐ家貞と宣て紀伊守六波羅の御一門もさぞ覚束なく思ひ給ふ申せは清盛公の千騎の阿部を小待とうかゝいふと同じ（は其ゆえいかゞ伊勢国伊東の兵共を都へ召せと御伴仕と三百余騎にて待参せひたれとせば敵を恐原をそれいかゝとて味方でうれはれてやものどもそこらの色と恥て我さ死ぬとぞみた　下畧

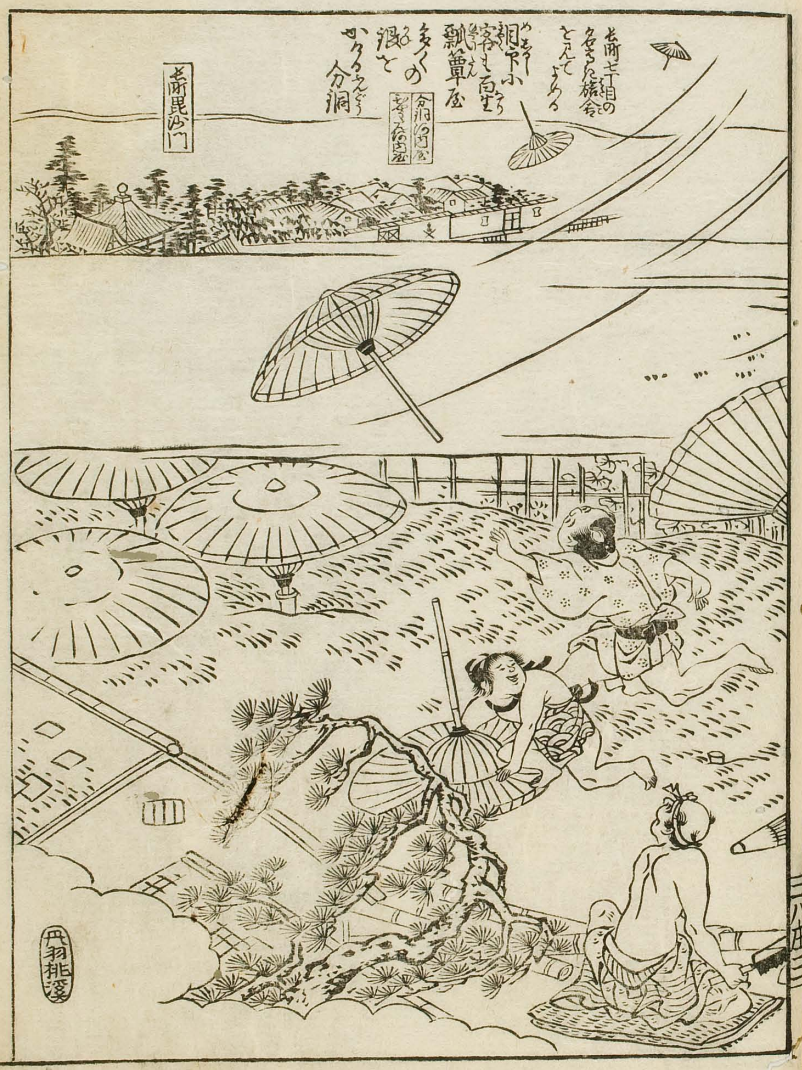
北畠顕家卿墓

阿部小あう土人大名塚と称ス顕家卿ハ正二位大納言北畠准后親房卿の長子なり元弘三年陸奥の国司鎮守府将軍ト任ス建武丙子の春賊軍京師ヲ陷レ帝台嶺小年ハ顕家卿義貞正成と京師ヲ取ル因て詔して征夷大将軍小任ス国小ヲ徴ス　帝南狩ス　時小顕家卿霊山城小在て勅命を奉て上野国利根川小戦ひたるう鎌倉を陥レ軍兵を駆て懐州黒血川小到て力戦利あらず仍て勢州を歴て南都小屯ス　般若坂小戦ふ利あらず仍て敗走ス鳴集ス　堺浦小屯ス　遂小軍を進て摂津国小戦ふ九月を其時元弘四年五月二十二日なり　従二位と贈ル

顕家卿の御父北畠準后親房卿を其祖親王の苗裔大納言師重の子村上
源氏にして職原鈔の作者なり人皇九十五代　後醍醐天皇に仕へ
北條高時を亡し天下一統の後又足利尊氏の叛逆に出て官を奪
官に遷りまれと南朝と稱を尊氏光明院をうて京都の天皇を
故に天下悉く南北の両朝と称ず南朝北朝各紀元を建南朝延文
四年八月十六日　南帝崩ず第七の皇子後村上院即位明年
興國と改元北朝の光明院暦應三年なり　後村上院御幼少にして
親房卿　光帝の遺詔を奉て政を摂し氏帝初め準后の姫子顕家卿
とをうけて大傅こうん大宮職に　紫壇の大夫なり故に興國元年二月職原抄
と撰んで幼帝に教ずる蓋これ周公の命と黜陟夷と減し州に巡り
豊に在て周官を作るの遺意なりしと
已上職原参考大意
古今拾遺云
光帝の御時原中納言ちのくれいくとあまたまうこうめひ國くも
まつげてみの國まてあるしをたのしさにたちて國くにくまうけて
あのそしき中に侍ひる小阿部貞の露ときえさせひる小を
刑部卿も形うる其さえのうえとまうてなくかたち小ちり火の
さえ消るやうに小なむ人くの御父の御いとうあるをに
されたてしをやをくに小うきせのとにたちひまれて　親房卿
小の御とにまつりませ給へて文小小花を形うるとうにて
あるて小水かとうにたる後小又の日の夕暮の後小をう御公地の
いてさせ給ひ文
玉の緒乃半くも果はてくうそ世をうに浮世小むとけるうん　小の方
花貴ーにをまーにち絶るかくれのうちちるく作うくれいをこと
り絶てくのまちうくれいかもまを絶てて親公寄といるを
寄てかくーにを絶ーてまをまを絶るを小
むさてもかたれぬ面影いうれ世のかのあくれ　月
文小三ーせの花をーのて世のさかれもちはくこのまうをはさたう
るさやのうをやをひ出れくむ方ををおさせのくを
いつく小うを伝ひ文三方貴のをーのくをとおてのく見を　月
親房御の御をを小をちく形ーて暁うを小をおさせひる小御公
のたをさを絶ーねまうれ世のうををれいくを見のる小あり明の月乃
いくをう小山の端ちくをくれく

月江寺

やろうけ投


浦七組の名さん旅会とんてゝ
相下小
繁と百生
剛筆屋
多くの
渦と
分洞
丹羽桃溪

名是町の
名めくしん傾の
紙しん傘と多く
張て法國へ
吹大ふめまちらく
干しろ時麗風
吹ふう傘を
傘上るさらんゝ
柄を強くおろれ
真人も逆ふ吹飛
されて柄こ放さて
ふんとく放さて
ゝれたの國ふぬ
國ふふう其國の
王時ふう船ふて
日本へ送り原れ
しとめる人の
ゝさうた

列るれとあひもちてゐ三右衛門のこゝろ小さをなれあるの月　日

阿部殿と色を給ひ名小袖かむとの人のきえ給ひ給へと若々れ給ふの上小袖ぬを給ひて

形き人のこゝろの色色乃毛花毛もむ一の袖のしらあ　日

仕ほとう小刑乃色ともあうう世とそむこそのうゝとあひ給ひ名小袖

乃毛あうて御あうう商と見るるこもゆくしくまこと給ひ名御ゝとひれゆ刑し

かてう毛ろ給ひ名ゝと成もと免あて仮若天王寺のかりうまで御と

くゝ小毛あうてあくあかい名小天王寺亀井の水のかうゝ形る杉の本と名刑して

後の世乃ちきうのあ小紙一名ゝむとゝ亀井の水くれの跡　日

と書けけゆ給ひ給へ道八幡ゝ小名ゝ一と給ひ易本を治ゝ名に

いとあら杉ゝひまうて其のち天王寺小毛あうゝ名小御筆の跡のこゝ乃ゝて

殘りゝと見まう給ひてゝ名小袖と言ゝ小名ゝ小ゝて其後都小のほら給ひて

無君とゝ小世とゝむ見て給ひゝゝゝゝれゝちゆひてゝゝゝれゝの毛ゝ給ひ

名と同十中納言資朝卿の御むと免給ひしゝて

小町墳　阿部殿大名塚の側小あう

小町塚　小町塚ゝゝ小町ゝ毛きゝめてゝゝゝ形ゝ部おゝゝゝ毛商ゝ玉造ゝゝ久小見ゝ

ゝゝ仏文信三講行ゝ御ゝゝゝゝ説あれと高野の大師の御化の目録小

ゝゝゝ大師を承和のゝ久小かくれゆゝゝ小町ゝゝかゝゝゝ其後

の小ゝゝ狩衣ゝ

経塚　小町塚の側小あう土人曰上官を子一石一宮の

経と書寫しゝ藏りゆひしゝゝゝ

播磨墳　経塚の側ゝあう抜小むゝ仏化ゝの墓所ゝて荒墳となう四圍と

周きゝゝられゝゝゝ以あの殘墓形ゝ下級小姫名ゝゝゝ形ゝ

萱艸塚　大名塚ゝゝ信阿村ゝゝ二町斗西北の側小あう姫ゝふむゝの宮女傳な

ゝ萱艸宮女小相應ゝ松虫ゝ宮女の名多ゝ下級て悲塚

を町斗南小あ

根里ゝ名小多一昔ゝ身分の領地小藝ゝ事あう領ゝ変れ

ゝ荒塚ゝゝゝて姫名と喪人己下正一かゝゝゝ載ゝ年なう

兼好古蹟　相傳ゝ阿部殿小あう天下茶屋村の里長日天下茶屋村の内今の

御道ゝう二町斜東小丸ゝゝゝゝゝゝれ其旧蹟なう

ゝゝ下小石の

實居あう

扶桑隠逸傳ニ曰

兼好ハ者卜部ノ兼顯カ之子大ー織ー冠ノ之苗裔ナリ也博覽ニ

無ニ所レ不ニ上窺ハ能ク綴リ和語ニ巧ニ作ル和歌ー時ニ論ノ為ニ少ニ有ニ俳ー

體ー嘗ニ仕ニ建ー治ー帝ニ為ニ武衛ノ次ー将ニ正ー中元ー年ー帝升遐ス

兼好乃削髪入修學院後上横川深匿影迹兼好尋常清貧糴與頓阿善嘗乞米及錢於頓阿因以折句歌見意頓阿亦不賒荅又以歌而乞錢而已其貧交可想見也兼好與清閑寺道我為友又毎遊高師直之家皆以和歌交一日師直託兼好作艶簡兼好便書其不抱也如此偶一月望夜來乘月詣千本釋迦堂潛入堂後而獨聽遺教經有美婦人忽然而來傍兼好之側膏粉如移蘭麝襲人兼好則避席婦人慕來兼好即起席而去蓋宮女之知兼好者欲見其節操而相謀為之也嘗論心友之難得而曰獨坐燈下讀書友古人樂莫過於此焉好讀文選白氏文集老莊之書又愛李朝古文所著寂寞草往々示己志初兼好有童兒善詠和歌且知之萬葉古今之事兼好出家之後今川了俊招之念待左右云云

家隆卿墳

勝鬘院の後小野の地名と夕陽山と人塚上小古石あり舊棲石とまた又側ホ多陽菴石ろ礼ば旧趾といふ

天王寺にて四天王寺小野の地名と夕陽山と人塚上小古石あり舊棲石とまた又側ホ多陽菴石ろ礼ば旧趾といふ

十二首の中

夫本 難波の海を云 井小野にて詠 松を尋ぬる人 弥陀の御國へ 家隆

契りあれば難波の里小野にて 苔の下にも住まるべしや

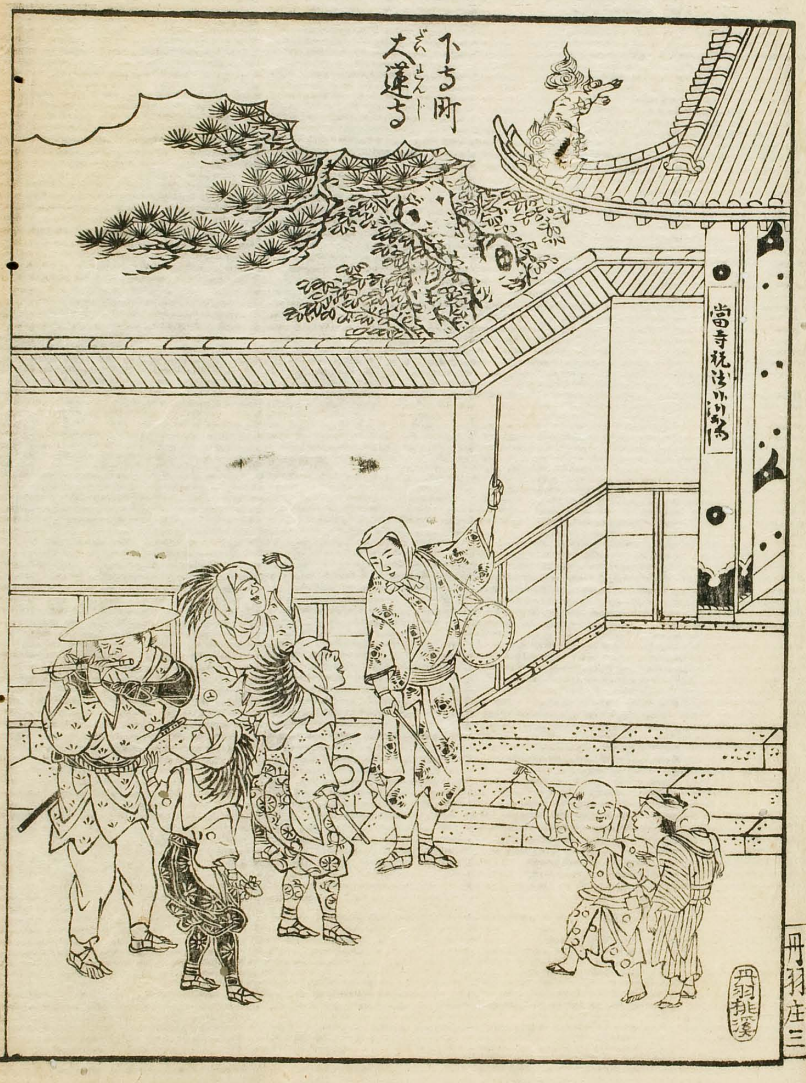
氏詠より地名と夕陽山と人塚上小古石あり舊棲石とまた又側ホ多陽菴石ろ礼ば旧趾といふ

道祖久の御堂の碑と四十二世牧野伯爵正盛順ろ小建られ一形ろ

其文曰

従二位家隆卿墓碣銘并序

夫和歌王者之德也國風之始也通于三才乎六義託始於素戔嗚雲神詠祖宗於人麻呂赤人二儁自爾而後其道英傑代不乏人出其類拔其萃不羣之思飄逸之詞獨步古今者其惟公乎公姓藤原諱家隆歴事七朝叙從二位累官至宮内卿其先出于閑院左僕射冬嗣公祖考猶聞黄門清隆卿賜采壬生二位考權中納言太宰權帥光隆邑故弗壬生二位公相踵食采於人麻呂游卿妣太皇太后宮權大夫入道釋阿門執第子禮毎就尋譯和歌奥旨然直訪古意不必究細故俊成恒歎曰不意後生能至於斯也其將以和歌鳴乎可謂爾来歌集五輩俊彦允應喜選公居其一數遇年久二年春三月勅撰新古今和歌後鳥羽上皇叡慮頻名與定家拗衡永元年冬定家卿奉旨奏新勅撰集皇頗政事暇與攝卿和歌最多當時以為榮上皇集中采摭家隆卿政良経公論國風事公奏請家隆卿赤代人麻呂敷高蜂也上欲學此道宜師自詠三十六番和歌是賢鴻業日漸西行人請俊成定家判之繽紛修飾御裳濯川宮川歌合自隨身一日携来授公日精徹之蘊盡在自期在瀬後生須歌如公可得毎斯書圓位往生自期在瀬後生須歌如公可得耶我有所思謹以奉遺也松殿僧正行意疾篤



假寐忽夢識志賀山毘沙門見一神人呼行意名唱一首歌琅誦之聲感盪心身驚覺病乃癒其歌公建保年中九月十三夜侍内宴所詠河月歌也其妙通鬼神如此矣喜禎二年冬十二月嬰病罷官落髮自稱日佛性年七十有九浪速荒陵北擇不食地謝絶人緣遁迹閑邃心諸邦三年頃四月九日自詠七首和歌蓋聚諸悔樂罪之意誥且深浴更衣住日想觀酉刻端坐合掌如瞻真身迎接安祥而逝報齡八十歲留葬其居植以松標歲寒心使人永懷八勿前翦上云今也四百有歲遺趾猶存然而荊棘之所穢鞠為樵竪之區近日詞客徒翹慕德音欲勒堅珉以文設節祭以餌俾後勿廢而可辭於子嗚呼子之德哉不得已遂銘其詞

旨安井門主大僧正道恕撰拜書

休矣一時歌仙芳蘭吐蘂罷賚非一古百代往其能幾何

東寺享保第六東寺大寺兼華嚴宗長吏

斯文未喪燕雀可為咨公之德光赤奮若秋九月下澣

非堅蕪穢荒陵之丘作者孔多追今有聞君子所懇其身既沒萬世彌彰

含萃體玄元久奉勅明錦脫機鴻猷贊隱上嘉其忠撰集慎懿詞花言葉

隆専寺
糸桜
永風俗と
唄の
風の
桜
浪花遊
琵琶

丹羽桃溪

有栖山新佛水寺　天王寺の西小あり初め有栖川寺と号れむ〜齊宮の女御
雅信の祈願田畝ありてあるとき洪水の時に有栖川小僧一人
本尊十一面千手観音　聖徳太子の門化脇士に地蔵毘沙門天なれば天王寺の側小
梨うして寛永十七年京師音羽山佛水寺より此本尊を遷し亭保
年中新佛水寺と称す堂あの基より遥小眺れば西南の遠山滄海の
頭真妙うして京師の音羽の
佛ほ瀬も劣ざる風色なり
有栖佛水　石階の下　大悲水　舞楽の角小あり　所供水なり
開基延海塔　舞臺の由縁齋貞柳碑　石階の側小あり狂言と
下小あり　耳を遠くなるは近く成小ろう夏さあせるゆりこの清　貞柳
酒も佐よく　天王寺　顔の赤さも又平は四天王寺のむめ下うけ　貞柳
増井佛水　佛水の下角の方小あり
七名泉の其一なり
深瀬とり人滝延の看樓を新佛水小傳る原氏名い貝鰯の絡小て其
器を見る小鮑の貝乃十一の穴あると塞ぐて酒とれ小盛れば七合半
盛れるこれ小満酌して飲ぞるくと譽う〜暢酣帙とあ〜其名と署
ばこれ風俗ありうぎ由縁奇が
ぞうれ好るく小又保ろやはの國の雅俗あるの深淵の月　貞柳

貝盃の袋を唐織小してむ〜長寿我邪え親とり人勇將の敵
羽織とり人又幾瀬とり人貝盃あるされい鶉貝之僅を合絲盛れる氏
袋も深瀬とは日ドあるを銘と鳴門と号して衣光貝の杯あり
紅毛ワうの貝巵絡と表風とり人君うれ梅うえなどり人絶の酒器
あり七人猩々とり人盃を常の盞小して朱塗小七人猩々の蒔繪あり
大器小して六升五合盛れるぞむ〜より三人斗これ之欲〜
るとぞ聞十又万葉小又人てる三輪の於春寿恵とり人土器あり之れい
大むう〜醴とこれ小盛て土中小埋し其所の土神と祭う〜器あり又
芭蕉翁の一軸あり

松風の軒とめうて秋くれぬ
されい氏翁浪速津小旅寢しの人付南門堂のあと邪座ろうう小て
逝〜の人お九月十六日ろうう遺れ〜と今小松風會とてあうと
ぶん又氏翁の句うり

此秋を何て小しら雲子毛

これも此亭の什物とぞ其真偽をしらず又半時庵

稲妻のひかる夜さらせよ比叡の山

陝々

此第のあるじの名はかくらんと名乗柞ちの酒旗世小飄りて諸国の飲客

恨葦小到まば乞此帘小攫て此酒器と覩て興一ありひハ飲一劉

伶ゞ陶々たる樂ともちゝ小及て絃寸小戯れ雪小醉ひ花小醒して樂

倉恨と見れば斜陽の遠帆小かくれ三日の月淡海山小蔵るゝ

れもゝ此舩と饗一る風情と飲器の大なるとを武とひ小ゝ

文とりて中義も保頼貴瀬の孫あるゝとを用十

遊行寺藥師堂

勝鬘坂小あり時宗佛智山

圓成極樂寺とゝ

寺尊藥師佛

龍宮出現之像長三尺六寸寺説ゝ皇子勝鬘絶

寓舎ゝ遊行五十一世賦爲上人ゝれと求て藥師堂

溝潰の霊場旧蹟ゝ時宗の祖一遍上人天王寺参籠の時の

報恩あるて遊り一所の道場となる

芭蕉翁像

寺堂の側小安ゝ坐像ゝ七寸此肖像初メ近州あるゝ江府

始くなせり此近年二柳奮國蝶夢かゞゝ徳仰のおもゝ

列記ゝ書ゝ

芭蕉翁碑

高九尺初メハ当寺厨の傍小あり近年堂

前小後ゝ表題黄檗侯山の筆背文ハ

泛野井中納言久澄卿の墨跡銘ゝ

豊前州の醫師香月牛山撰ゝ

曼倩諧語

相如俳文

表題

芭蕉翁墓

黄檗侯山筆

背文

妙辞奇句

思ヲ入ル風雲ニ

碑銘曰

享保十九甲寅晩秋日前豊倉藩醫官

八十翁牛山香月啓益謹

姓ハ松尾宇ハ甚蕉翁一産ニ于伊賀ニ官

桃青子

于伊勢ニ卒ス于難波ニ其顛末載ニ于野坡子之碑文ニ

故不レ費セ矣餘嘗テ觀ル世間九流百家稱レ師ヲ呼レ弟ト者上

生前懐ニ其ノ德ニ者最ニ多及ニ身歿ニ也報ニ其恩ヲ者甚ニ少キハ

何乎蓋學ニ其ノ道ニ而未レ得則不レ遠ニ千里ニ来テ待テ事ヲ左

右ニ而仰テ望ニ其德ニ是レ有レ所レ求ル于彼ニ也既ニ得レ之則棄ル

之ヲ如ス辨髦ノ以レ恥レ稱レ師ト況乎報ニ其恩ヲ耶夫レ誹諧者

和歌ノ之一體也嗜ム之者稱ル之ヲ道ヲ而擇フ之カ師ヲ者不ニ

亦宜ニ乎翁素ヨリ嗜ミ此ノ道ヲ壮テ而致ニ仕ヲ遂ニ離レテ郷ヲ而到テ両

都及ヒ難波ニ所ノ之ク慶門人弟子營シ室廬ニ致ニ衣食ヲ以テ

給ス烏然ニ其性洒落テ四壁而立所レ寓ニ無ニ突ニ黔之地ニ

其動静語默必於レ詼可レ謂ニ此ノ道ノ之盟主滑稽之

巨擘ニ也嘗テ謂ニ弟子ニ曰誹諧ハ者和歌之一體也古

哲ハ所ニ謂和歌無レ師ニ伸テ己カ之性情ヲ而吟ニ咏ヲ焉ヲ而天

下之口非ニ一世ニ輿ニ時相變ニ矣以レ故格調モ亦自ニ異

猶ヲ和歌ノ於ニ今古ニ唐詩ノ於ニ盛晩上然ニ唯ク顧ニ結選ノ道如

何ヲ耳ニ賴テ翁ノ得ニ此道ヲ解ニ其惑ヲ者億萬翁然而化ス矣

蓋開西東渚此道者悉莫不為之歸壹是皆稱其流亞就中野坡子傑然繼其緒以倡此道于四方當翁之七田諱辰遠来西肥縦史其門人而建碣于長寄乎自裁碑文復當十七田忌之歴来筑紫與其第子相謀而建碑于笘寄今一茲来赤間關券防長以東迄難波諸州門生而彫刻石碑建于天王寺裏其所其他翁之墓散在諸州者一在江之義仲寺一在東都深川長慶寺其在洛之雙林寺者翁之門人支考所建云今野坡子所建者蓋難波翁之所卒地也是欲傳師德乎久遠而不朽矧謝師恩乎當己以不諂也一日野坡子扣餘門来告曰我既老矣建翁之五十回忌亦不可知故有此舉今年實翁之謝世四十一年云乞碑文餘曰吾子之巧其勒哉餘雖不敏不敢辭嘉奬其欲謝師恩之志為云

誌

珊瑚寺

天王寺町ふあり禅宗曹洞

一条山と号ス開基薄鱗和尚

秀吉公尊像

長八寸許五十七歳の時の作之茶山俗理をまの家内茶山小松にて小作茶寺ようおれ

風吹不動石像

日所を平寺境内小あり醫師小山壽菴が墳之背面小文あり

又堂内小日風吹不動の木像と安ス又浦堂翁の文墳碑

今口偈と書ん

月江寺

天王寺町ふあり浄土宗女僧寺之明山林照度と号ス

開基東京比丘尼永禄十年草創中興恵光尼

尊阿弥陀佛

慈心の化座像三尺寺内小櫻花あって弥生の盛久美艶あり又藤の棚ありて花のいい海ゆくさば法

茶店ふ土器あり東の門外の皇を天正年中織田信長の勢溝佐久間信盛の城跡あり世小真田が抜道と

ふを蓬あり此所初秋の比虫の聲多し四時の眺あり所謂合

祥寺の接花林ありて色の香多くして枕の紙岸と盛ふ又同寺の

接勝鬘の八重接菩提寺の紅接圓軟るの山吹ちり接分

遅日の眺あるべし

天王寺の城塚

月江寺則其塚あり佐久間信盛等ち小塚て元亀

天正の比題如上人の石山城と称る基堅固ありて年月経

送る信盛庫所小花て寄品と成て諸將を聚え茶會を

催ス信長これを聞て大小不興あり此城天正十年小ら

鳳林寺

日所小あり禪宗曹洞最東山と号ス

開基茂藝復藝和尚寺領二圓明殿華屋宗章大姉

轉法輪三條殿の女ふ北條十郎氏房の妻あり當寺天正十六

年の開創なり武州市川永福寺の

末寺當庫一流の僧録ふ

寺尊釋尊

左藥師右弥陀佛殿小安ス又聖観ふ長二尺聖德

をふの御化容殿小安ス又什寶小寶珠二顆

あり于滿と称ス圓形五分許黄金の寶塔小龕む往昔將軍

家上洛ふして葵御紋の嚢を拜領ス又弘法大師の真筆

兆殿司の十六

羅漢の画像あり

孔雀茶店

孔雀は孔子の家禽なり文恵太子の羽毛を飾り裘とし翠毛を以て扇とせしなり孔雀の錦毛の美なるが如し其外諸鳥の飼く茶店の繁昌しるに半なり

丹羽桃溪

百濟野　南は天王寺の東の里より少し北に村小橋のかたらひとよび原郡名〜
續日本紀小日百濟郡荒廢の田二十七町の里と原朝臣勝小
賜ふことを俗謂ふ百濟郡の村邑あり部南部東部等は仁德帝の
御時開水路上て海となる云々然るといへども順の和名小載られしより
後世百濟の郡里と稱て東生の大郡小俗ゞ故小東生郡と書り
近世入鹿の宮も除て今百濟郡絶せり挾小騒乱の後領主
地頭東生小ある時は其近き一圖小我郡名とられる事なり堤
郡界不分明なれはなり近江國小於ても善積の一郡圖より
されも堤防なる事大反船場久を郎町と寶永百濟町とよ
認あり分明なれば韻の日しるべかく附會の認とよ
万葉
くさ〻ぶの萩のさかえ小妻まれと位し舊なれ小えかも　赤人
文本
百濟野のちやうの下のをめのりは森原人小ちらぬをうえ　仲實
日
くさ〻ぶの乃ぶ乃下小ちらう孫やもあらん小をへきりう　道因法師

攝津名所圖會巻之貳終